町内遺跡発掘調査報告書VII

2010.3

埼玉県入間郡三芳町教育委員会

はじめに

三芳町は、都心から僅か 30km の位置にありながら、武蔵野の面影を偲ばせる雑木林が随所に広がる、緑豊かな町であります。また、県指定旧跡「三富開拓地割遺跡」や県指定有形民俗文化財「竹間沢車人形」などをはじめ、数多くの文化財を伝え残しています。

昭和40年代までは、畑作中心の純農村地帯として緩やかに発展してきましたが、高度成長期からバブル期にかけて、住宅開発や工場、倉庫等の進出によりその姿は急速な発展、変貌を遂げてきました。

このような都市化の進展や経済的な発展の代償として、緑地や文化財が失われてきたのも事実であり、三芳町教育委員会としては、文化財保護を教育行政の重点施策に位置づけて、先人たちが培ってきた様々な文化や歴史を、将来への発展の礎となる貴重な遺産として保護し、伝え残していく努力を続けています。とりわけ、町内に残された32箇所の遺跡すなわち埋蔵文化財は、開発により直接的に失われていく文化財ですが、幸いにして国および県の補助を得て記録保存のための発掘調査を実施することができました。

ここに刊行する町内遺跡発掘調査報告書VIIには、国庫・県費補助事業として平成 18 年度から平成 20 年度の 3 ヵ年にわたり実施した町内遺跡発掘調査事業の成果が記録されています。

開発に先立つ発掘調査が実施され、本書が刊行できますことは、ひとえに関係各位のご 理解とご協力の賜と厚く御礼申し上げます。

また、本書が多くの方々の埋蔵文化財に対する理解と関心を深め、郷土の歴史・文化遺産を伝え残し、三芳町がより一層の発展を遂げていくための一助となることを願ってやみません。

三芳町教育委員会教育長 柳 榮治

例 言

- 1. 本書は、埼玉県入間郡三芳町に所在する三芳町町内遺跡の発掘調査成果の報告書である。 発掘調査および整理作業は三芳町教育委員会が主体となり、国庫・県費補助事業として平成18年度から平成20年度までの3年間に実施した調査成果をまとめた。
- 2. 本書に収録した発掘・試掘確認調査は、国庫補助事業「町内遺跡発掘調査」事業として、 平成 18 年度に総額 3,703,454 円(国庫 1,800,000 円・県費 600,000 円・町費 1,303,454 円) 平成 19 年度に総額 2,101,272 円(国庫 1,000,000 円・県費 330,000 円・町費 771,272 円) 平成 20 年度に総額 3,064,434 円(国庫 1,500,000 円・県費 500,000 円・町費 1,064,434 円) をもって実施したものである。本書の作成は、平成 21 年度国庫補助事業「町内遺跡発掘調査」事業の一環として実施した。
- 3. 自然科学分析については、平成20年度の町費事業として業務委託を行った。
- 4. 調査組織は下記の通りである。

調查主体者 三芳町教育委員会 教育長 柳 榮治

調查事務局 生涯学習課 課 長 金子 明

同 課長補佐 松本富雄(平成20年度まで)

調査担当係 文化財保護係 係 長 松本富雄(平成20年度まで)

同 柳井章宏(平成21年度より)

 同
 主
 事
 中村 愛

 同
 大久保淳

5. 本書の執筆、挿図・図版作成、編集は大久保淳が行い、遺物実測図作成・拓本・写真撮影は(株)東京航業研究所に業務委託を行い、IV.自然科学分析はパリノ・サーヴェイ(株)に業務委託を行った。また、作成にあたっては松本富雄、柳井章宏、越前谷理、中村愛の協力を得た。

- 6. 本書に掲載した図版等の読み方は、それぞれの図で示した。
- 7. 本書に掲載した地図は、三芳町発行の 1/2,500、1/10,000 である。
- 8. 本書の作成・編集には、主に Adobe 社製 Illustrator CS3、Photoshop CS3、InDesign CS3、Acrobat 8 を使用した。
- 9. 発掘調査及び出土資料の整理・報告にあたり、下記の諸氏・関係機関のご教授・ご指導を賜った。 記して感謝の意を表したい。(順不同、敬称略)

石塚和則、加藤秀之、亀田直美、隈本健介、栗岡眞理子、栗島義明、小菅将夫、佐藤康二、高崎直成、 辻本崇夫、坪田幹男、鍋島直久、西井幸雄、野口淳、早坂廣人、藤波啓容、堀善之、安井智幸、 柳沢健司、和田晋治、埼玉県生涯学習文化財課、ふじみ野市教育委員会、富士見市教育委員会、 (有)アルケーリサーチ、(株)東京航業研究所、パリノ・サーヴェイ(株)

10. 発掘調査ならびに整理作業参加者は下記の皆様である。(敬称略)

調查員:雨宮悟郎

協力員:新井光持、伊藤恵美子、井上康弘、今井武久、内山茂男、大久保和恵、数馬田惟、木村智則、 佐藤利秀、佐藤洋子、城本勝眞、鈴木崇夫、谷禎三、田村早苗、冨田茂夫、仲井キヨ子、 中野純一、永野仁美、野上吉樹、八田香能子、林文夫、藤原和夫、堀田敦子、保谷野未来、 黛佳代子、向竹之、森谷等、山田あつ子

凡例

- 1. 本書で使用した図面の方位は全て座標北であり、測量は日本測地系に基づいている。
- 2. 土層断面図中の は第1黒色帯、 は第2黒色帯上層、 は第2黒色帯下層を示す。
- 3. 遺構挿図中の「接1」とは「接合資料1」の略である。
- 4. 石器・礫属性表の遺構名「IV石 1」、「IV礫 1」は「IV層石器集中 1」、「IV層礫群 1」の略である。
- 5. 石材の略号は下記の通りである。

黒曜石 - Ob ガラス質黒色安山岩 - An 頁岩 - Sh

目 次	第6図遺	貴構全体図・土層断面図(1/60)・・・・・・10
जिल्ला । अक्षण की	第7図土	上層断面図・エレベーション図 (1/60)・・・・11
はじめに	第8図出	日土土器 (1/3) · · · · · · · 12
例言	第 9 図 調	周査位置図(1/2,500)・・・・・・・13
目次・挿図目次・表目次・写真図版目次	第10図 Ⅳ	/層礫群1 石材・赤化・煤状付着物・
I. 序章	重	這量グラフ ・・・・・・14
1. 三芳町町内遺跡について 1	第11図 遺	遺構分布図 (1/1,200)・土層断面図(1/120)
2. 遺跡の立地と環境 2		15
Ⅱ. 年度ごとの調査概要 4	第12図 Ⅳ	/層石器集中 1 器種別分布図 (1/60)16
1. 発掘調査 4	第13図 Ⅳ	層石器集中 1 母岩別分布図(1/60)・・・・・17
2. 試掘確認調査 4	第14図 Ⅳ	/層礫群 1 重量別分布図(1/60)・・・・・・18
Ⅲ. 各遺跡の調査・・・・・・・・ 6	第15図 出	1土石器(2/3)・・・・・・21
1. 本村南遺跡第9地点の調査 6	第16図 Ⅳ	層礫群1 石材・赤化・煤状付着物・
1)遺跡の立地と概要6	重	i量グラフ ・・・・・・22
2)調査の概要6	第17図 遺	1構分布図(1/1,200)・Ⅳ層石器集中 1・
3) 遺構と遺物6	碑	終群 1 分布図(1/60)・土層断面図(1/60)・
2. 本村南遺跡第10地点の調査9	H	1土石器(2/3)・・・・・・23
1)調査の概要9	第18図調	査位置図 (1/2,500)・調査区設定図 (1/1,200)
2) 遺構と遺物9		· · · · 25
3. 上永久保遺跡第1地点の調査13	第19図 出	1土石器(2/3) · · · · · · · · · 26
1)遺跡の立地と概要13	第 20 図 遺	! 物分布図(1/160) · · · · · · · · · · · · · 26
2)調査の概要13	第21図2	トレ深掘の柱状図および火山ガラス比・・・・36
3) 遺構と遺物13	第22図2	トレ深掘上部での植物珪酸体含量の
4. 上永久保遺跡第2地点の調査22	層	f位的变化 · · · · · · · · 37
1)調査の概要22		
2) 遺構と遺物22	表目次	
5. 藤久保東第二遺跡 D 地点の調査25		
1)遺跡の立地と概要25	第 1 表	試掘確認調査一覧表(1)4
2)調査の概要25	第 2 表	試掘確認調査一覧表(2)5
3) 遺構と遺物25	第 3 表	IV層石器集中 1 母岩別器種一覧表 ··14
Ⅳ. 自然科学分析 · · · · · 29	第 4 表	石器・礫属性表 (1)19
	第 5 表	石器・礫属性表 (2)20
挿図目次	第 6 表	石器・礫属性表(3)21
	第 7 表	IV層石器集中 1 母岩別器種一覧表 ··22
第 1 図 三芳町遺跡分布図 (1/30,000) 3	第 8 表	石器・礫属性表 (1)24
第 2 図 調査位置図 (1/2,500)・調査区設定図	第 9 表	石器・礫属性表 (1)27
(1/1,200)····· 6	第 10 表	石器・礫属性表 (2)28
第 3 図 遺構全体図・エレベーション図 (1/40)… 7	第 11 表	2トレ深掘の火山ガラス比分析結果・37
第 4 図 1号井戸エレベーション図 (1/40)8	第 12 表	2トレ深掘の植物珪酸体含量37
第 5 図 1号井戸出土板碑片 (1/4) 9	第 13 表	2トレ深掘の土壌理化学分析結果37

写真図版目次

写真図版 1 平成 18 年度 本村南遺跡第 9 地点・第 10 地点

本村南遺跡第9地点調査風景

本村南遺跡第9地点調查風景

本村南遺跡第9地点出土遺物(1/4)

本村南遺跡第10地点1・2号方形周溝墓

本村南遺跡第 10 地点 1·2 号方形周溝墓

写真図版 2 平成 18 年度 本村南遺跡第 10 地点

本村南遺跡第10地点1号方形周溝墓北西溝断面

本村南遺跡第10地点1号方形周溝墓北東溝断面

本村南遺跡第10地点1号方形周溝墓方台部断面

本村南遺跡第10地点2号方形周溝墓北西溝断面

本村南遺跡第10地点出土遺物(1/4)

写真図版3 平成18年度古井戸山遺跡VII次調查,

藤久保東第三遺跡第3地点,本村北遺跡

古井戸山遺跡VII次調査 遺物分布状況

古井戸山遺跡四次調査 遺物分布状況

古井戸山遺跡四次調査 遺物出土状況

古井戸山遺跡VII次調査 遺物出土状況

古井戸山遺跡VII次調査 完掘

藤久保東第三遺跡第3地点 炉穴確認状況

本村北遺跡 調查風景, 本村北遺跡 完掘

写真図版 4 平成 18 年度 生出窪遺跡, 本村南遺跡,

生出窪北遺跡,上永久保遺跡第1地点

生出窪遺跡 調查風景,生出窪遺跡 完掘,本村南遺跡 完掘

生出窪北遺跡 調查前全景, 生出窪北遺跡 完掘

上永久保遺跡第1地点調查風景

上永久保遺跡第 1 地点 石器集中·礫群確認状況

上永久保第1地点出土遺物(3/4)

写真図版 5 平成 18 年度 上永久保遺跡第 1 地点,

藤久保東遺跡 U 地点·V 地点

上永久保第1地点出土遺物(1/2)

藤久保東遺跡 U 地点 調査前全景, 藤久保東遺跡 U 地点 完掘 藤久保東遺跡 V 地点 調査前全景, 藤久保東遺跡 V 地点 完掘

写真図版 6 平成 18・19 年度 藤久保東遺跡 V 地点・W 地点,

生出窪南遺跡

藤久保東遺跡 V 地点 埋め戻し

藤久保東遺跡 W 地点 調査前全景

藤久保東遺跡 W 地点 表土剥ぎ

藤久保東遺跡 W 地点 溝跡確認状況

藤久保東遺跡 W 地点 溝跡・落し穴確認状況

生出窪南遺跡 調査前全景, 生出窪南遺跡 表土剥ぎ

生出窪南遺跡 完掘

写真図版7 平成19年度生出窪遺跡,藤久保東遺跡,

本村南遺跡第11地点

生出窪遺跡 調查風景, 生出窪遺跡 完掘

藤久保東遺跡 調査前全景, 藤久保東遺跡 表土剥ぎ

藤久保東遺跡 撹乱確認状況

本村南遺跡第11地点調査前全景

本村南遺跡第11地点調查風景

本村南遺跡第11地点住居址確認状況

写真図版 8 平成 19 年度 本村南遺跡第 11 地点,

南止遺跡 H 地点, 中東遺跡第2地点

本村南遺跡第11地点 溝跡確認状況

南止遺跡 H 地点 調查前全景

南止遺跡 H 地点 道路状遺構確認状況

南止遺跡H地点石器出土状況

中東遺跡第2地点調査前全景。中東遺跡第2地点表土剥ぎ

中東遺跡第2地点石器集中確認状況

中東遺跡第2地点石器出土状況

写真図版 9 平成 19・20 年度 中東遺跡第 3 地点 (1 次),

藤久保東第二遺跡 D 地点

中東遺跡第3地点(1次)調査前全景

中東遺跡第3地点(1次)調查風景

中東遺跡第3地点(1次)石器集中確認状況

中東遺跡第3地点(1次)ナイフ形石器出土状況

藤久保東第二遺跡 D 地点 調查前全景

藤久保東第二遺跡 D 地点 表土剥ぎ

藤久保東第二遺跡 D 地点 調查風景

藤久保東第二遺跡 D 地点 IV層礫群確認状況

写真図版 10 平成 20 年度 藤久保東第二遺跡 D 地点,

藤久保東遺跡 X 地点, 生出窪南遺跡

藤久保東第二遺跡 D 地点 土層断面

藤久保東第二遺跡 D 地点 出土遺物 (2/3)

藤久保東遺跡X地点調查前全景

藤久保東遺跡 X 地点 表土剥ぎ, 藤久保東遺跡 X 地点 完掘 藤久保東遺跡 X 地点 埋め戻し, 生出窪南遺跡 調査前全景

生出窪南遺跡 完掘

写真図版 11 平成 20 年度 本村南遺跡,

藤久保東第二遺跡E地点

本村南遺跡 調査前全景, 本村南遺跡 表土剥ぎ

本村南遺跡 調查風景, 本村南遺跡 完掘

本村南遺跡 埋め戻し

藤久保東第二遺跡 E 地点 調查前全景

藤久保東第二遺跡 E 地点 完掘

藤久保東第二遺跡 E 地点 埋め戻し

写真図版 12 平成 20 年度 上永久保遺跡第 2 地点,

中東遺跡第3地点(2次)

上永久保遺跡第2地点調查前全景

上永久保遺跡第2地点 表土剥ぎ

上永久保遺跡第2地点 礫群確認状況 上永久保遺跡第2地点 土坑確認状況

上永久保遺跡第2地点 土層断面

上永久保遺跡第2地点出土遺物(3/4)

中東遺跡第3地点(2次)調査前全景

写真図版 13 平成 20 年度 中東遺跡第 3 地点 (2 次),

東永久保遺跡

中東遺跡第3地点(2次)遺物確認状況

中東遺跡第3地点(2次)石核出土状況

中東遺跡第3地点(2次)ナイフ形石器出土状況

東永久保遺跡 調査前全景,東永久保遺跡 表土剥ぎ

東永久保遺跡 調查風景, 東永久保遺跡 完掘

東永久保遺跡 埋め戻し

図版2土壌薄片

写真図版 14 上永久保遺跡第 2 地点自然科学分析

図版 1 軽鉱物の状況・植物珪酸体

写真図版 15 上永久保遺跡第 2 地点自然科学分析

I. 序章

1. 三芳町町内遺跡について

三芳町は、埼玉県南西部の荒川右岸台地上に位置し、西方には富士山と秩父、多摩の山並みを遠望する平野地帯である。地形としては、西方約50km 先の青梅市付近を扇頂として広がる武蔵野台地の北東部にあたり、台地縁辺から切り込む開析谷により僅かな起伏をもつものの、そのほとんどが関東ローム層に厚く覆われ、ほぼ平坦な地形を呈している。

三芳町は、上述のように関東ローム層の厚く堆積した台地が占め、特に町の西部域は現在流れる河川も雨水排水用の掘割となった砂川のみであり、広々とした台地が続いている。近年の発掘調査により西部域にも数条の埋没谷が存在し、その周辺において旧石器時代から縄文時代早期の遺跡の存在が明らかになりつつあるが、谷の埋没以降、西部域の集落形成は江戸時代の新田開発が行われるまで待たねばならなかったようである。西部域で行われた新田開発の中でも、元禄7年から9年(1694~96)に川越藩主柳沢吉保の命により行われた三富地区の畑作新田開拓地(三芳町大字上富、所沢市中富、下富)は、埼玉県指定旧跡「三富開拓地割遺跡」として指定されており、今なお整然とした屋敷地と畑地と雑木林の区画が残され、武蔵野の典型的な新田開拓の面影をとどめる地域として知られる。

一方、町東部域はより武蔵野台地の縁辺に近く、柳瀬川をはじめとする荒川の沖積面に向かう数条の河川や開析谷が台地を切り込むように存在する。東部域はこれらの河川に沿って早くから開発が進み、西部域とは異なった様相を呈し、また原始・古代の遺跡も数多く存在する。

近年まで、三芳地域は自然環境に適応しつつ純農村地帯として緩やかな発展を遂げてきたが、都心より 30km 圏内にあることから都市化の波を強く受け、高度経済成長期からバブル期にかけて急激に変化してきた。町の東隣を走る東武東上線と地下鉄有楽町線の相互乗り入れ、関越自動車道路の貫通と所沢インターチェンジ設置等の交通手段の改善は、工場・倉庫等の企業進出や個人住宅・アパート・マンション等の住宅建設を促進させる結果となった。

三芳町には、現在32か所の埋蔵文化財包蔵地が知られるが、当然のことながら開発行為は埋蔵文化財包蔵地内にも及び、破壊の危機にさらされてきている。すでにそのうちの一部は住宅開発等により煙滅してしまったものもある。三芳町ではこうした状況に対処すべく、文化財保護法改正後、特に昭和51年度以降埋蔵文化財の保護、とりわけ記録保存のための発掘調査に力を注いできた。しかし、このような発掘調査は蚕食的・個別的調査であることが多く、充分な時間と費用を費やし調査が実施でき得ぬことも多く、また、開発者との間で調査費用・期間等について問題が生じることも少なくなかった。

町では、このような問題を少しでも解消すべく国庫・県費の補助を得て、「三芳町町東部遺跡群発掘調査事業」(昭和53年度〜昭和57年度)、「三芳町町内遺跡群発掘調査事業」(昭和58年度〜平成元年度)、「三芳町町内遺跡発掘調査事業」(平成2年度〜)として調査を実施してきた。遺跡範囲確認調査の実施により調査期間、調査方法、調査費用の積算等が容易になったことと、利益を目的としない個人住宅開発等の費用負担の問題を解消できたことは本事業の成果といえる。

本事業により、平成 18 年度は発掘調査 3 件、試掘確認調査 11 件、平成 19 年度は試掘確認調査 8 件、 平成 20 年度は試掘確認調査 9 件を実施した。

今回の報告は、平成18年度から平成20年度までの3年間の成果の記録報告である。

2. 遺跡の立地と環境

三芳町は、埼玉県の西南部に位置し、東に志木市、富士見市、南東に新座市、南西に所沢市、北にふじみ野市、川越市と接する。面積は 15.3k ㎡、人口は約 37,000 人である。地形的には、多摩川の開析扇状地といわれる武蔵野台地上の北東部縁辺に位置している。町の西部域は標高約 45m でほとんど平坦な地形を呈するが、標高 30m の等高線を境とする東部域には東方の沖積地 (荒川低地) に向かう河川が複数存在しており、遺跡の多くはこうした河川流域に分布している。また、近年の調査により、現在はほぼ平坦な地形を呈する西部域にも数条の埋没谷が存在し、その周辺で遺跡の存在が明らかになりつつある。以下、河川流域ごとに主要遺跡のこれまでの調査成果を概観する。

【砂川流域】現在は雨水排水用の掘割となっている砂川流域には、平成 16 年度実施の分布調査により新たに登録された遺跡が数多く存在する。上永久保遺跡(30)では 2 地点の調査が行われ、旧石器時代IV層の石器製作址や礫群、時期不明の土坑が検出されている。また、右岸の宮前遺跡(19)では、奈良・平安時代の木炭窯が検出され、同じ崖線上で奈良時代後半から平安時代にかけての大規模な製鉄遺跡、東台遺跡(ふじみ野市)に木炭を供給していた可能性もあり注目される。

【富士見江川流域】富士見江川最上流域付近には藤久保東遺跡(12)、藤久保東第二遺跡(10)、藤久保東第三遺跡(11)、侯埜遺跡(9)の旧石器時代を中心とした4つの遺跡が存在する。藤久保東遺跡、藤久保東第二遺跡では旧石器時代X層から局部磨製石斧3点を含む80点以上の石器や礫が出土しており、県内最古の石器群である。また、藤久保東遺跡では旧石器時代X層、IX層、III層、IV層、IV層、III層から10,000点を越える石器や礫が富士見江川旧河道に沿うように検出されている。侯埜遺跡では旧石器時代IX層~IV層にかけての石器、縄文時代早期の炉穴、縄文時代中期から後期の住居跡が検出されているほか、平成16年実施の発掘調査により奈良・平安時代の溶解炉、木炭窯、住居跡が検出され、町内で初めて製鉄遺跡の存在が確認された。

【唐沢堀流域】唐沢堀右岸には、新開遺跡(7)が存在する。昭和51年から調査が進められ、旧石器時代 V層~Ⅳ層より石器製作址39箇所、礫群45箇所のほか平安時代の須恵器窯跡、工房跡が検出されて いる。また、左岸には三芳唐沢遺跡(8)が存在し、旧石器時代の石器が出土している。

【柳瀬川流域】柳瀬川左岸には、上流より古井戸山遺跡(2)、本村南遺跡(1)、本村北遺跡(3)、北側遺跡(4) が存在する。古井戸山遺跡では旧石器時代の石器製作址や縄文時代前期の住居跡、弥生時代後期の住居跡が検出されているほか、縄文時代早期~後期、弥生時代中期~後期、奈良・平安時代、中世の遺物も認められることから、旧石器時代~弥生時代を中心として連綿と続く複合遺跡と考えられる。隣接する本村南遺跡は、かつて弥生時代中期末葉(宮ノ台式)の土器が出土したことで知られる。発掘調査では宮ノ台期の住居跡や弥生時代後期の方形周溝墓が確認され、弥生時代中期末葉から後期末葉を中心とする集落遺跡である。また、近年の調査により幅約3m、深さ約1.5mを測る溝跡が検出され、環濠が存在した可能性も考えられる。本村北遺跡では、縄文時代前期、古墳時代後期、奈良・平安時代の住居跡が検出されている。北側遺跡では現在のところ調査による遺構・遺物の検出は無いが、弥生時代後期の底部穿孔壺形土器の出土が知られる。

【西部域の埋没谷流域】砂川に合流もしくは並行すると考えられる埋没谷の上流域には、中東遺跡 (20) が広がる。これまでに 4 地点を調査し、旧石器時代区層、VII層、VII層、VII層、VII層 (12) 同様、重層的ら 3,400 点を越える石器や礫が出土しており、富士見江川最上流域に位置する藤久保東遺跡 (12) 同様、重層的な遺跡である。また、三芳町と所沢市の境を流れる埋没谷最上流域には南止遺跡 (21) が存在し、特に旧石器時代Ⅳ層下部で石器集中、礫群が多数確認されているほか、Ⅲ層上部において野岳・休場型の非削片系細石刃核、細石刃が出土している。

第1図 三芳町遺跡分布図 (1/30,000)

Ⅱ. 年度ごとの調査概要

平成 18 年度から平成 20 年度までの 3 年間に、町内遺跡発掘調査事業において調査を実施した遺跡は 13 遺跡 28 地点である。このうち、平成 18 年度は発掘調査 3 件、試掘確認調査 11 件、平成 19 年度は試掘確認調査 8 件、平成 20 年度は試掘確認調査 9 件を行った。年度ごとの調査概要は以下のとおりである。

1. 発掘調査

1) 本村南遺跡第9地点

所在地:三芳町大字竹間沢 875-2 調査原因:個人住宅建築

調查期間:平成18年4月24日~5月3日、22日、23日 調查面積:35㎡

開発者: 主な遺構:(近世)井戸跡1基他

2) 本村南遺跡第10地点

所在地:三芳町大字竹間沢 860-2,-3 調査原因:個人住宅建築

調查期間:平成18年7月6日~7月18日 調查面積:50㎡

開発者: 主な遺構:(弥生)方形周溝墓2基

3) 古井戸山遺跡VII次調査

所在地:三芳町大字竹間沢945-5,-6 調査原因:個人住宅建築

調查期間:平成18年8月2日~9月5日 調查面積:117㎡

開発者: 主な遺構:(縄文)土器包含層

2. 試掘確認調査

平成18年度から平成20年度に実施した試掘確認調査は、下記の通りである。

遺跡名称	調査原因	調査地	調査期間	面積	確認内容
本村南遺跡 第9地点	個人住宅	竹間沢 875-2	18.4.17 ~ 4.19	336 m	近世井戸跡 → 発掘調査(国庫補助)
本村南遺跡 第 10 地点	個人住宅	竹間沢 860-2,-3	18.5.24 ~ 6.2	171 m	弥生時代方形周溝墓 → 発掘調査(国庫補助)
藤久保東第三遺跡 第3地点	駐車場	藤久保 339-1 の 一部	18.6.14 ~ 7.11	2,686 m²	旧石器 VI層石器、焼石、 縄文時代炉穴 → 盛土保存、一部受託調査
本村北遺跡	個人住宅	竹間沢 795-1	18.6.27 ~ 6.28	652 m	遺物・遺構なし
生出窪遺跡	個人住宅	竹間沢 192-3,-4	18.7.20	337 m ²	遺物・遺構なし
古井戸山遺跡 VII次調査	個人住宅	竹間沢 945-5,-6	18.7.26 ~ 8.1	250 m [*]	縄文時代土器片 → 発掘調査(国庫補助)
本村南遺跡	駐車場	竹間沢 686-8 他	18.8.2 ~ 8.21	365 m	遺物・遺構なし
生出窪北遺跡	資材置場	竹間沢 255-1	18.8.22 ~ 9.19	3,026 m [‡]	遺物・遺構なし
上永久保遺跡 第1地点	工場増築	上富 1716-2 他	18.9.11 ~ 10.6	1,416 m	旧石器IV層石器集中、 礫群、時期不明土坑 →盛土保存、一部受託調査
藤久保東遺跡 U地点	分譲住宅	藤久保 796 他	18.11.13 ~ 11.22	538 m	遺物・遺構なし

遺跡名称	調査原因	調査地	調査期間	面積	確認内容
藤久保東遺跡 V地点	分譲住宅	藤久保 786-1 他	18.12.11 ~ 12.22	1,280 m	旧石器炭化物集中 →盛土保存
藤久保東遺跡 W地点	店舗建設	藤久保 782-1 の 一部 ,783 の一部	19.5.14 ~ 5.22	753 m [‡]	旧石器IV層下部石器、焼石、 時期不明落し穴、溝跡 → 盛土保存、一部受託調査
生出窪南遺跡	駐車場	竹間沢 926-1	19.7.18 ~ 7.23	1,273 m	遺物・遺構なし
生出窪遺跡	個人住宅	竹間沢 193-3	19.9.21 ~ 9.26	201 m	遺物・遺構なし
藤久保東遺跡	個人住宅	藤久保 784 の 一部	19.10.22	354 m	遺物・遺構なし
本村南遺跡 第 11 地点	携帯電話 基地局鉄塔	竹間沢 850-1	19.11.8 ~ 11.16	250 m	弥生時代中期~後期 住居址4軒、溝跡1条 →受託調査
南止遺跡H地点	墓地増設	上富 696-1 他	20.1.25 ~ 2.15	860 m ²	旧石器IV層下部~V層 石器集中、礫群、縄文集石、 時期不明道路状遺構等 →盛土保存、一部受託調査
中東遺跡第2地点	倉庫増築	上富 167-4 他	20.3.7 ~ 3.18	470 m	旧石器IX層石器集中 →盛土保存、一部受託調査
中東遺跡第3地点(1次)	倉庫増築	上富 168-2	20.3.11 ~ 3.28	1,644 m	旧石器IV~VII層石器、焼石、 縄文時代土器片 → 受託調査
藤久保東第二遺跡 D地点	アパート 建築	藤久保 725-3	20.5.7 ~ 5.19	553 m [*]	旧石器Ⅳ層石器、焼石 → 盛土保存
藤久保東遺跡 X地点	分譲住宅	藤久保 814 の 一部	20.5.22 ~ 6.2	1,029 m	遺物・遺構なし
生出窪南遺跡	店舗建設	竹間沢 1031-6 他	20.6.11	443 m ²	遺物・遺構なし
本村南遺跡	個人住宅	竹間沢 864-6	20.8.18 ~ 8.21	357 mੈ	遺物・遺構なし
藤久保東第二遺跡 E 地点	個人住宅	藤久保 724-31	20.9.17 ~ 9.30	360 m²	遺物・遺構なし
上永久保遺跡 第2地点	工場増築	上富 1696-3 他	20.10.17 ~ 10.22	3,109 m	旧石器Ⅳ層石器集中、礫群、 時期不明坑 →盛土保存
中東遺跡第3地点(2次)	倉庫増築	上富 165-2 他	20.11.25 ~ 12.5	3,020 ทั้	旧石器IV・VI・VII層石器集中 → 受託調査
東永久保遺跡	自動車 修理工場	上富 2129-1 他	21.2.23 ~ 3.9	2,869 m	遺物・遺構なし

第2表 試掘確認調查一覧表(2)

Ⅲ. 各遺跡の調査

1. 本村南遺跡第9地点の調査

1)遺跡の立地と概要

本村南遺跡は、武蔵野台地を開析する柳瀬川の左岸台地縁辺部、柳瀬川により形成された河岸 段丘の小さなテラス状部分に位置し、遺跡の北側にも柳瀬川に流れ込む通称「盆川」と呼ばれる小 河川が小さな谷戸を形成している。これまでに8地点2,774㎡の発掘調査が行われ、宮ノ台期の 住居跡1軒、弥生時代後期の住居跡16軒、方形周溝墓1基、古墳時代の住居跡1軒、地下式坑2 基、井戸跡2基、時期不明の土坑3基、溝8条が検出されている。

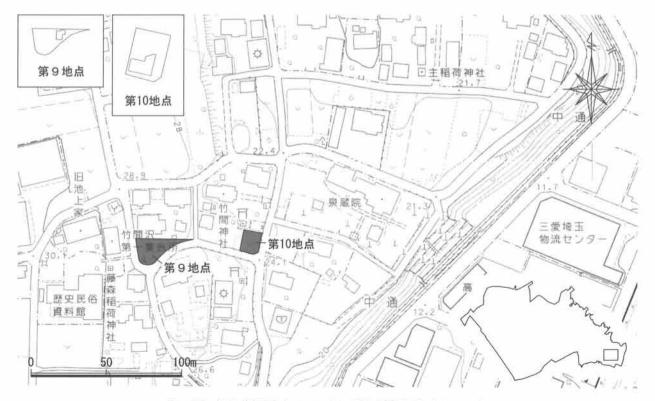
2)調査の概要

今回の調査地点である第9地点は、埼玉県入間郡三芳町竹間沢875-2に位置する。調査は個人住宅建築に先立つ遺跡の範囲及び性格・内容を把握するための試掘確認調査として、平成18年4月17日~4月19日にかけて336㎡を実施した。調査の結果、地下に空洞部を持つ遺構が存在する可能性が強いと判断され、住宅建築後に陥没する危険性があることから申請者と協議を行い、範囲を限定した35㎡について平成18年4月24日~5月3日、22日、23日にかけて発掘調査を実施することとなった。今回の調査地は、周知の埋蔵文化財包蔵地(県遺跡番号32-001)の西部に位置する。

3)遺構と遺物

遺構は、井戸跡 1 基、土坑 26 基が検出され、遺物は板碑片、陶器片、砥石、擂鉢等が出土した。 1号井戸(第3・4図)

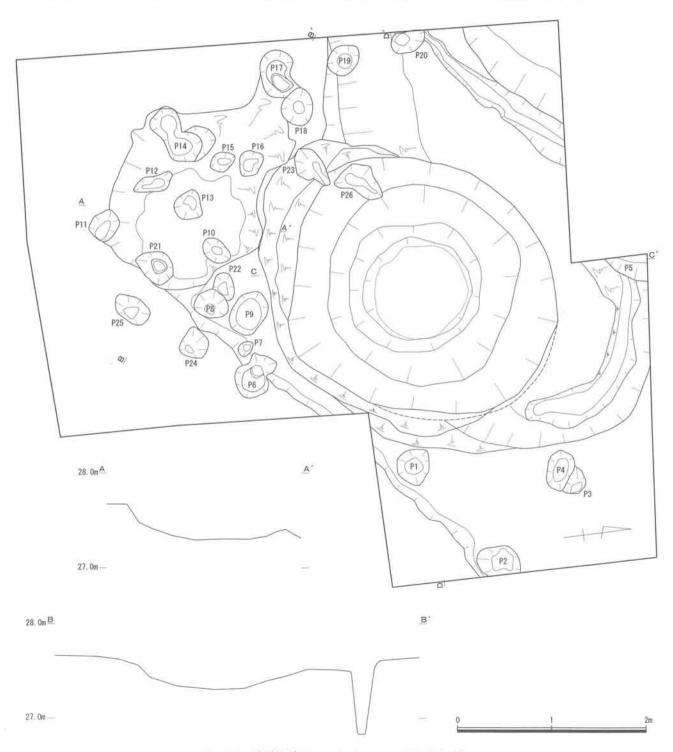
上端部分が東側から南西側にかけて若干崩れているが、平面形態は 3.1m × 2.7m でほぼ円形を 呈する。断面は漏斗状、深さは確認面より 3.1m である。井戸の西側から北側にかけては、井戸に 向かって緩やかに傾斜していくテラス状の平坦面があり、井戸に接続していた道であろうと考え



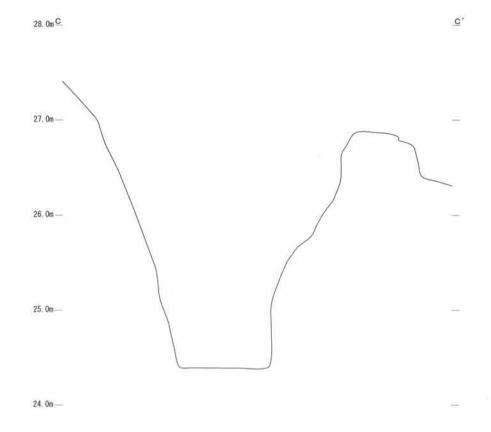
第2図 調查位置図 (1/2,500)·調查区設定図 (1/1,200)

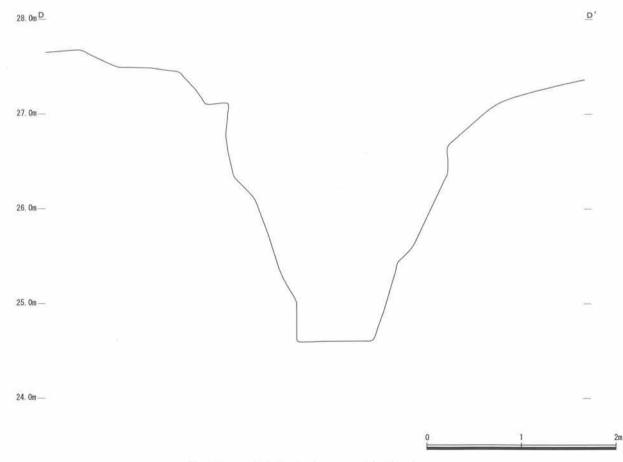
られる。テラスには北側に溝状の掘り込みが巡っている。また、井戸の南西側には浅い皿状の掘り込みがあり、その周辺を中心として土坑が多数検出されている。土坑の深さは $35 \,\mathrm{cm} \sim 100 \,\mathrm{cm}$ と幅があるが、 $70 \,\mathrm{cm}$ 以上のものは P1($80 \,\mathrm{cm}$)、P8($90 \,\mathrm{cm}$)、P11($75 \,\mathrm{cm}$)、P13($100 \,\mathrm{cm}$)、P14($80 \,\mathrm{cm}$)、P17($80 \,\mathrm{cm}$)、P18($70 \,\mathrm{cm}$)、P20($70 \,\mathrm{cm}$)である。また、P1、P6、P8、P13、P17 は底面の形状等から角柱が設置されていたことが考えられ、皿状の掘り込みとあわせて、この場所に井戸に附属する何らかの施設が存在していたことが想定される。

遺物は、井戸覆土中より板碑片、灰釉陶器片、砥石、擂鉢、礫等、P9 覆土中より灰釉陶器片、砥石、 礫が出土した。板碑片は出土した6点のうち1点に紀年銘の一部(第5図1)、1点に梵字と蓮座 の一部(第5図2)が確認された。なお、紀年銘は「応仁三年」(1469年)と判読できる。

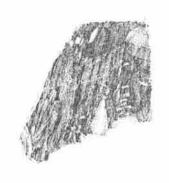


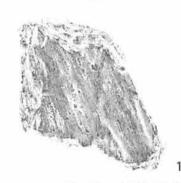
第3図 遺構全体図・エレベーション図 (1/40)





第4図 1号井戸エレベーション図 (1/40)









第5図 1号井戸出土板碑片(1/4)

2. 本村南遺跡第10地点の調査

1)調査の概要

第10地点は、埼玉県入間郡三芳町竹間沢860-2,-3に位置する。調査は個人住宅建築に先立つ遺跡の範囲及び性格・内容を把握するための試掘確認調査として、平成18年5月24日~6月2日にかけて171㎡を実施し、弥生時代の遺物を包含する遺構が検出された。申請者と協議を行った結果、住宅部分は遺構の盛土保存が可能だが、自宅用駐車スペースは隣接する道路面まで掘削するため、範囲を限定した50㎡について平成18年7月6日~7月18日にかけて発掘調査を実施することとなった。今回の調査地は、周知の埋蔵文化財包蔵地(県遺跡番号32-001)の南西部に位置する。

2) 遺構と遺物

遺構は、方形周溝墓 2 基が検出され、遺物は底部穿孔壺形土器のほか、甕形土器片、台付甕形土器片等が出土した。全て弥生時代後期の範疇であると考えられる。なお、遺構に切り合い関係はなく、25cm ほどの僅かな距離を残して隣接している。

【方形周溝幕】

1号方形周溝墓(第6・7図)

遺構の大部分は道路へ伸びており、検出されたのは北西溝から北東溝の一部のみである。溝は北西溝が上幅 121cm 前後、下幅 90cm 前後、深さ 40cm 前後を測り、北角付近で上幅・下幅ともに増して北東溝では上幅 152cm 前後、下幅 121cm 前後、深さ 40cm 前後を測る。断面形は逆台形を呈し、溝底はほぼ平坦で立ち上がりは急斜である。主体部は検出されなかったが、調査区の南西断面には黒ボク層 (14 層)を掘り込む土坑状の掘り込み (13 層) が見られ、この部分が主体部であった可能性もある。

遺物は、北角部から北東溝にかけて、覆土中より壺形土器、甕形土器、台付甕形土器の破片が 多数出土した。そのうち、北東溝内でまとまって出土した壺形土器は胴部を若干欠くものの、ほ ぼ完形まで復元され、底部が大きく穿孔されていた(第8図1)。

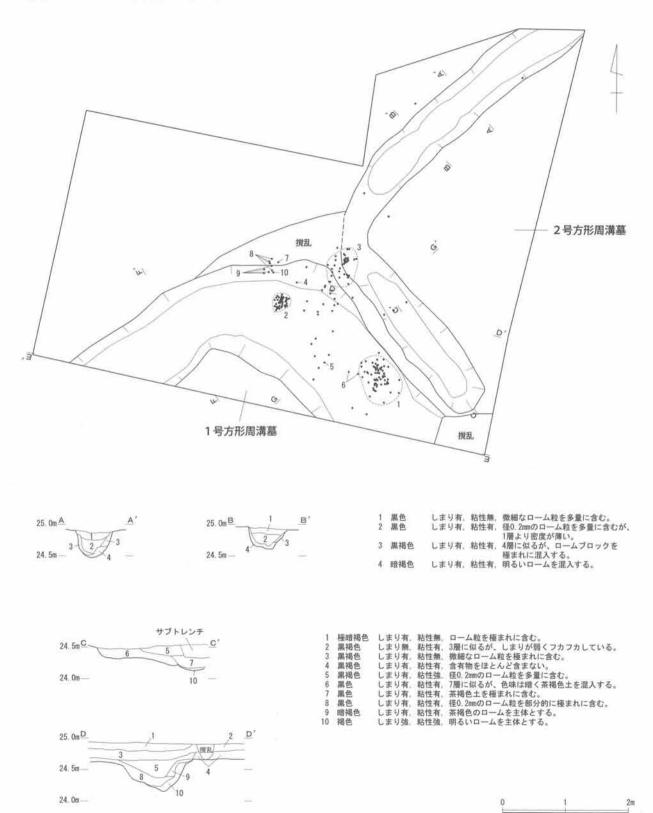
2号方形周溝墓(第6·7図)

遺構のおよそ半分は調査区外へ伸びており、今回の調査では南東溝と北西溝の大半が検出された。溝は南東溝が長さ309cm、上幅72cm前後、下幅36cm前後、深さ42cm前後を測り、北西溝は上幅72cm前後、下幅42cm前後、深さ36cm前後を測る。断面形はU字状を呈し、溝の立ち上がりは1号方形周溝墓よりも急斜である。なお、溝は南角を掘り残して陸橋としているが、南東溝、北西溝ともに西角付近でも緩やかに立ち上がっていることから、西角についても陸橋であった可能性が高い。主体部は検出されていない。

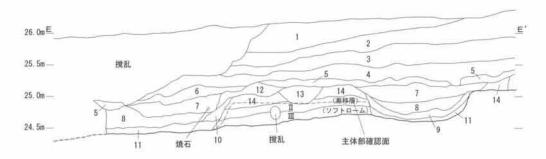
遺物は、西角付近で同一個体と思われる多数の甕形土器片がまとまって出土した。

【土器】

1 は壺形土器である。口縁部に面をもち、頸部は緩やかに抉れ、胴部下半に最大径をもつ。底部は大きく穿孔されている。外面調整は、ハケ目後に縦方向を基本としたヘラミガキだが、胴部下半から底部にかけては斜め方向にヘラミガキが施される。内面は器面の剥離が激しいが、口縁部はハケ目後ヘラミガキされ、胴部はハケ目調整であろう。また、遺存状態は極めて悪いが、外面は赤彩されていた可能性もある。



第6図 遺構全体図・土層断面図(1/60)



```
黑褐色
                                  径0.1~0,5mmのローム粒を多量、径0.1mm~0.3mmの赤色スコリアを少量、黒色スコリアを微量に含む。
                          粘性弱.
    黒褐色
               しまり弱.
                         粘性弱
粘性弱
                                  径0.1~0.3mmのローム粒を少量、径0.1mm~0.3mmの赤色スコリアを微量、黒色スコリアを微量に含む。1層に比べ暗い。
径0.1~0.3mmのローム粒を非常に多く含み、径0.1mm~0.3mmの赤色スコリアを少量、黒色スコリアを少量に含む。2層に比べ明るい。
                                  径0.1~0.3mmのローム粒を多量、径0.1mm~0.3mmの赤色スコリアを少量、黒色スコリアを微量に含む。3層に比べ暗い。
径0.1~0.3mmのローム粒を少量、径0.1mm~0.3mmの赤色スコリアを微量に含む。
    黑褐色
               しまり弱
                         粘性弱.
    黒色
               しまり強
                         粘性有.
                                  |径0.1~0.3mmのローム粒を多量、径0.1mm~0.3mmの赤色スコリアを微量に含む。
|径0.1~0.3mmのローム粒を多量、径0.1mm~0.3mmの赤色スコリアを微量に含む。5層に比べ明るく、ローム粒多く含む。
    黑色
                          粘性有
    黑色
               しまり強
                          粘性有
                                  径0.1~0.3mmのローム粒を非常に多く含み、径0.1mm~0.3mmの赤色スコリアを微量に含む。7層に比べさらにロー径0.1~0.3mmのローム粒を非常に多く含み、径0.1mm~0.3mmのホ色スコリアを微量に含む。11層への漸移層。
    黑褐色
                          粘性有
    暗褐色
                 まり強
                         粘性有.
                                  任い、1~0、3mmのローム粒を非常に多く言み、後い、1mm~い、3mmの赤色スコリアを敬重に含む。11層への漸移層。
黒褐色ブロックを混入する。ロームを主体とする。
経色、1~0、3mmのローム粒を少量、径0、1mm~0、3mmの赤色スコリアを微量に含む。5、6層の黒褐色ブロックを混入する
径0、1~0、3mmのローム粒を少量会む。黒ボク層にあたる14層に比べて黒味有り。主体部か?
径0、1~0、3mmのローム粒を少量、径0、1mm~0、3mmの赤色スコリアを微量に含む。いわゆる黒ボク層。
10
    極暗褐色
                 まり強
                         粘性強
11
               しまり強
    褐色
                         粘性強.
12
    黑褐色
               しまり有
                         粘性有,
    暗黒褐色
               しまり強
                         粘性有.
```



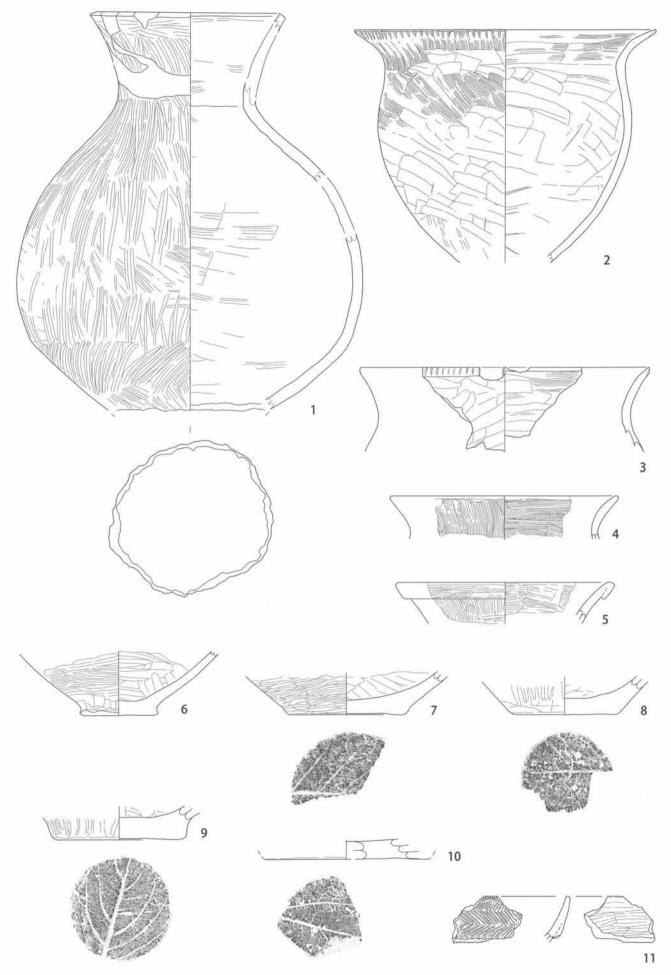
第7図 土層断面図・エレベーション図 (1/60)

2 は台付甕形土器で、甕部の 1/3 程度が残存する。口唇部にハケ目工具による押圧が見られる。 外面の調整は、口縁部が縦方向のハケ目後ヘラナデ、胴部は斜め方向のハケ目後ヘラナデだが、 下半は縦方向のハケ目後ヘラナデが施される。内面は口縁部が横方向のハケ目、胴部はヘラナデ される。全体的に器面が摩滅している。

3 は甕形土器の口縁部破片である。口唇部に刻み目が巡る。外面は斜め方向のヘラナデ、内面は口縁部に横位のハケ目が施される。接合復元には至らなかったが、同一個体と思われる破片が 2 号方形周溝墓の西角付近にまとまって出土している。

- 4、5 は壺形土器の口縁部破片である。4 の外面は縦方向のハケ目、内面には横方向のハケ目が施される。5 は複合口縁である。内外面ともにハケ目による調整が施される。
- 6、7 は壺形土器の底部破片である。ともに外面調整は横位のヘラミガキ、内面はヘラナデされ、7 は木葉痕を有する。
- 8、9、10 は底部破片であり、いずれも木葉痕を有する。8、9 の外面調整は縦方向のヘラミガキ、 内面はヘラナデ調整が施される。10 は底面の一部のみ残存する。

11 は壺形土器の口縁部破片である。複合口縁の外面には単節縄文が羽状に施される。また、口縁部外面下端には棒状工具による刻み目が見られる。内面は赤彩されている。撹乱土層中より出土した。



第8図 出土土器 (1/3)

3. 上永久保遺跡第1地点の調査

1)遺跡の立地と概要

上永久保遺跡は、狭山丘陵に端を発し、三芳町とふじみ野市の行政付近を流れ新河岸川へ合流する、砂川(現砂川堀)の左岸部に位置する。平成16年度に遺跡登録されて以降、これまで試掘確認調査は行われていなかったが、分布調査時には尖頭器や石器剥片、焼石など旧石器時代の遺物が表採されており、当該期の遺構の存在が想定されていた。

2)調査の概要

今回の調査地点である第1地点は、埼玉県入間郡三芳町上富1716-2他に位置する。調査は工場増築に先立つ遺跡の範囲及び性格・内容を把握するための試掘確認調査として、平成18年9月11日~10月6日にかけて1,416㎡を実施した。調査の結果、旧石器時代の石器集中、礫群、時期不明の土坑が検出されたため、申請者と協議を行い、予定建物の基礎部分にあたる土坑のみ受託による発掘調査を行い、その他の遺構は全て盛土にて保存することとなった。今回の調査地は、周知の埋蔵文化財包蔵地(県遺跡番号32-030)の南部中央に位置する。

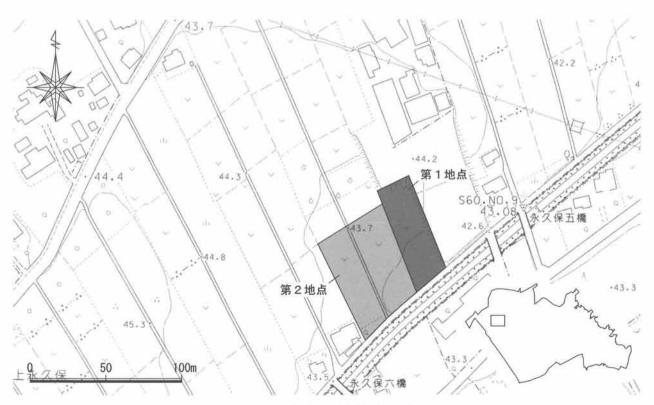
3) 遺構と遺物

遺構は、旧石器時代IV層より石器集中1箇所、礫群1箇所、時期不明の土坑2基が検出され、遺物は石器63点、礫91点が出土した。

【石器集中】

石器集中1(第12・13図)

調査区中央北側に位置し、礫群1の分布域と重なる。石器の分布は南北8.8m×東西3mと広範囲に及び、さらに調査区外へ広がっている。内部は、長径3.7mの範囲でやや密集する集中部とその周辺に広がる石器で構成され、石器の大半は礫群の集中部よりも若干東側に分布する。垂直分布は概ね10層に位置している。なお、第1地点および第2地点の地形は砂川の谷に向かう緩斜面上であり、ローム層の堆積が台地上とは異なる様相を呈していた。第2地点で実施した自然科学分析の結果(「IV.自然科



第9図 調査位置図 (1/2,500)

学分析」参照)を鑑みると、第1地点の10層は立川ロームIV層に相当すると考えられることから、石器集中1はIV層に位置すると判断した。石器の総点数は61点であり、石材は黒曜石2母岩、チャート4母岩、頁岩1母岩で構成される。主な石器はナイフ形石器、剥片、石核などである。接合関係は全て石器集中内で、チャート1が3個体見られた。石器集中1ではチャート1を主体として石器製作を行ったと考えられるが、石材の質が悪いことや、出土した剥片類が大ぶりであること、接合資料を観察しても剥片剥離作業を行った明確な痕跡が見られないことなどから、おそらくこの場ではチャート1を荒割りして、石器として使える素材を見つけ出す作業を行っていたと考えられる。また、黒曜石、頁岩の石器はともに1点ずつであり、他からの持ち込みであろうと思われる。

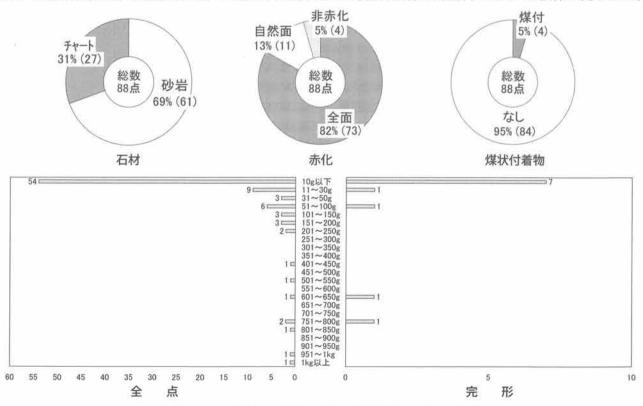
母岩名/器種	サイフ形石器	剥片	砕片	石核	点数	重量(g)	点数比	重量比
黒曜石1		1			1	0.71	1.64%	0.06%
黒曜石2			1		1	0.06	1.64%	0.01%
チャート1		27	10	3	40	1076.08	65. 57%	96, 54%
チャート2		9	1		10	11.66	16.39%	1.05%
チャート3		6			6	18, 15	9.84%	1.63%
チャート4		1		1	2	4. 96	3. 28%	0. 44%
頁岩1	1				1	3.07	1.64%	0. 28%
合計	1	44	12	4	61	1114.69	100.00%	100,00%

第3表 IV層石器集中1 母岩別器種一覧表

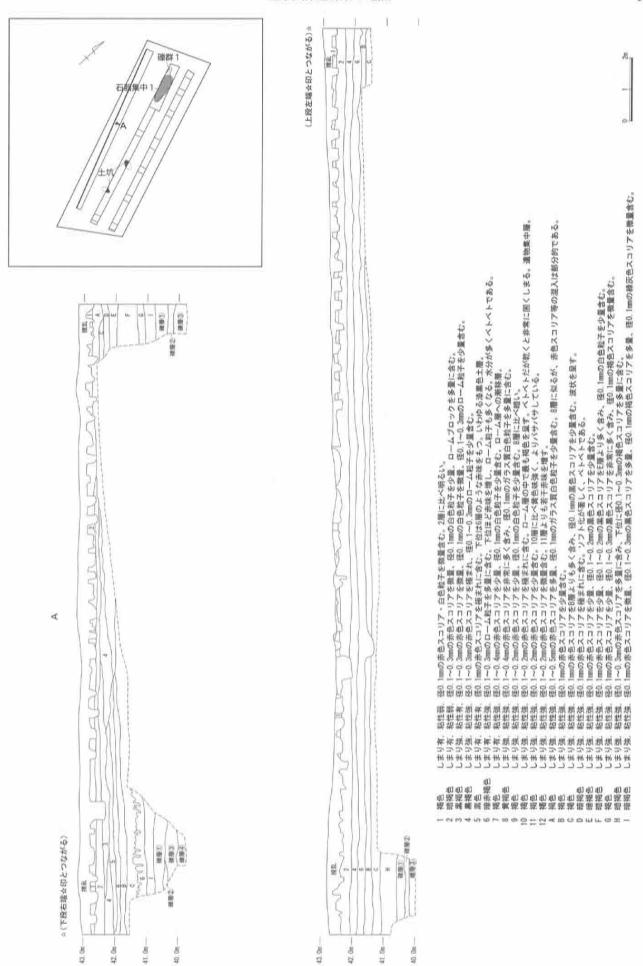
【礫群】

礫群1(第14図)

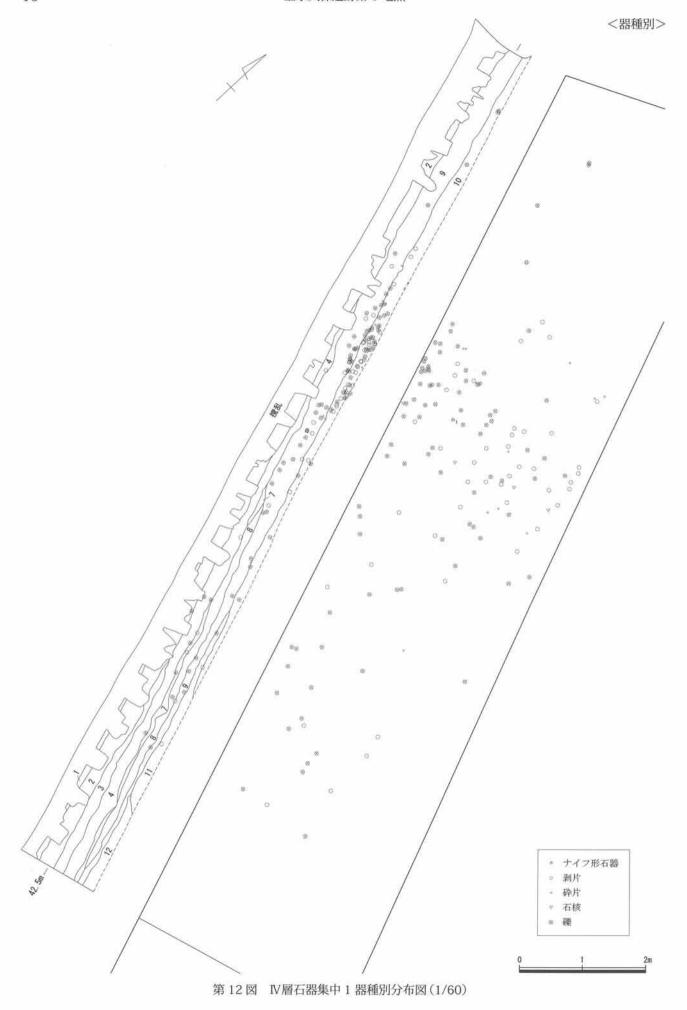
調査区中央北側に位置し、石器集中1の分布域と重なる。礫の分布は南北11.6m×東西3.1m、さらに調査区外の特に西側へ広がると思われる。内部は長径1.3mの範囲でやや密集する集中部とその周辺に広がる礫で構成され、礫の大半は石器集中よりも若干西側に分布する。垂直分布は概ね10層に位置し、石器集中と同様、IV層の礫群であると考えられる。礫の総点数は88点、重量は50g以下が全体の75%にあたる66点と小礫で構成される。石材は砂岩が最も多いが、町東部の富士見江川最上流域に位置する藤久保東遺跡の礫群礫に比べて脆く、石質が異なる。接合関係は礫群内のみで14個体が見られた。

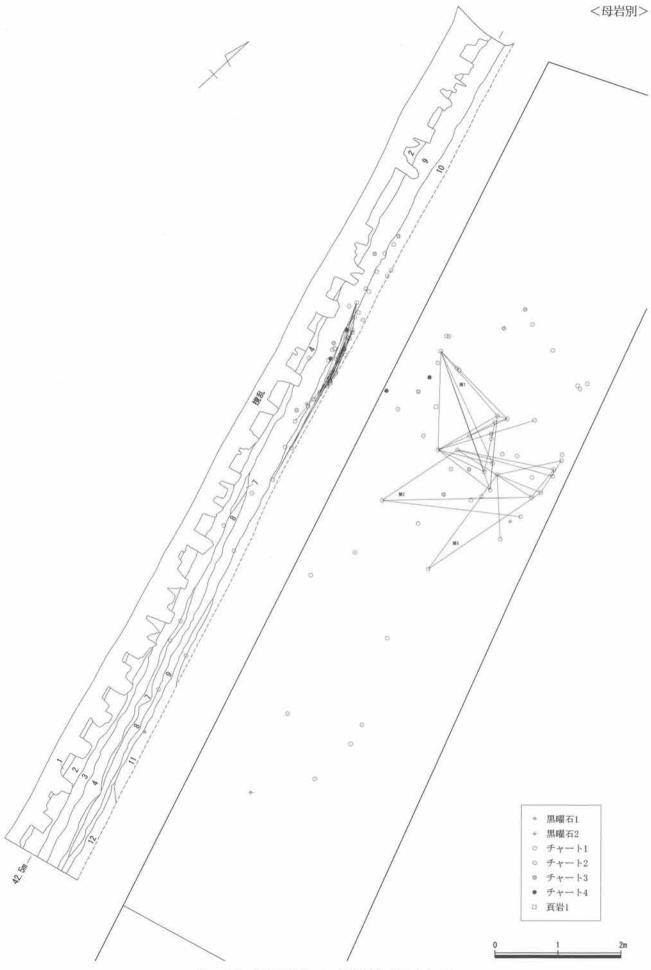


第 10 図 IV層礫群 1 石材・赤化・煤状付着物・重量グラフ

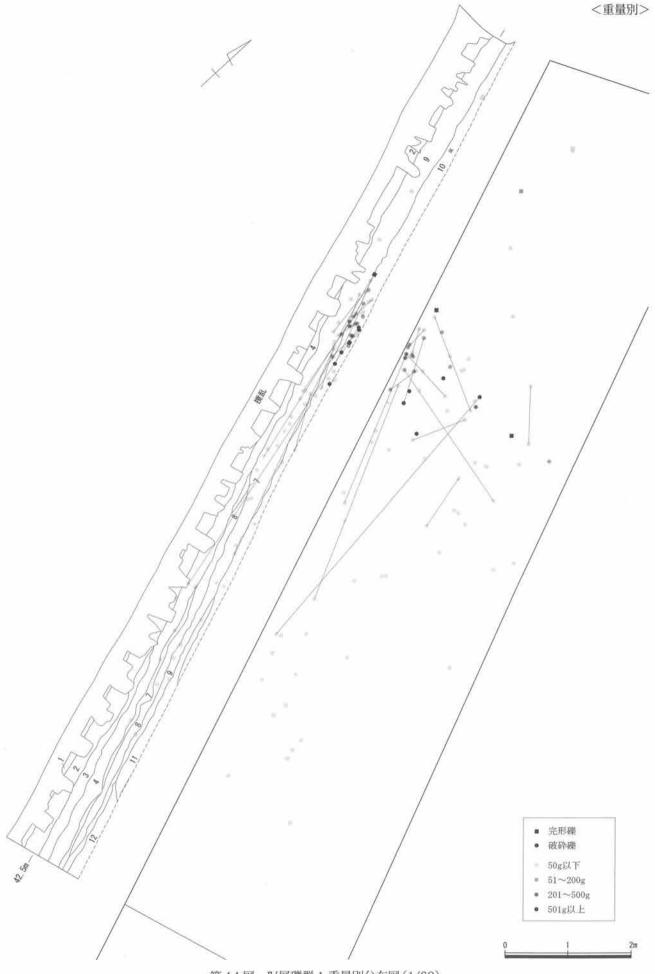


第11 図 遺構分布図 (1/1,200) ・ 土層断面図 (1/120)





第13図 IV層石器集中1母岩別分布図(1/60)



第 14 図 IV層礫群 1 重量別分布図 (1/60)

遺構名		配録遺物No.	Tree Proc	石材	母岩	接合資料No.	-	_			重量	長さ (mm)	縣 (mm)	厚き (mm)	排図N
	イプツ	0148	礫	砂岩			0	0	×	0	1.53				
	イブッ	0149	礫	砂岩			0	0	×	0	2.15				
	イブッ	0150	礫	砂岩			0	×	×	×	111.84				
	イブッ	0152	砕片		チャート5						1.31	17.41	9.61	7.97	
	イブッ	0153	剥片	チャート	チャート1						0.62	13.52	11.89	4.33	
IV石1	プロツク1	0009	砕片	チャート	チャート2		1				0.01	6.84	1.65	1.45	
IV石1	プ ロック1	0031	剥片	チャート	チャート3						3.10	19.93	24.64	6.97	
IV石1	フ*ロック1	0032-1	砕片	チャート	チャート1						0.04	5.68	2.87	2.80	
IV石1	プ ロック1	0032-2	砕片	チャート	チャート1						0.02	4.42	2.26	1.93	
IV石1	フ* ロック1	0033	剥片	チャート	チャート1						0.83				-
IV石1	フ" ロック 1	100000000000000000000000000000000000000	剥片		チャート1	1					37.69		51.78		
IV石1	フ* ロツク1		剥片		チャート2						0.11	12.83	5.45	1.80	
N石1	フ* ロツケ1	0037	剥片		チャート1	1					35.75		35.45	A CONTRACTOR OF THE PARTY OF TH	-
IV石1	プ ロック1			頁岩	頁岩1						3.07	and the second street	29.15	8.21	1
IV石1		0040-2	剥片	Control of the Control	チャート3						0.88		18.09	4.90	
IV石1	ブ ロック1	The state of the s	剥片		チャート2										-
	フ*ロック1	-			チャート1						3.23		19.53	7.01	
IV石1		0042	剥片								0.62		11.69	6.25	
IV石1	プロッケ1	100000000000000000000000000000000000000	剥片		チャート1						23.13				
N石1	フ ロック1	0044	砕片	黒曜石	黒曜石2						0.06	7.99	4.30	2.74	
IV石1	プ ロック1		剥片		チャート1	3					26.42			28.56	
IV石1	プロツケ1	0047	剥片		チャート3						11.85			16.53	
	プ ロック1	0048	剥片	C-S-7 14 70	チャート2						0.12		12.45	2.63	
	プ ロック1	0049	剥片		チャート1						1.61	16.80		8.66	
	ブ ロック1	0055	剥片	チャート	チャート2						1.66	18.16	13.80	6.82	
IV石1	プ ロック1	0056	欠番												
IV石1	フ*ロック1	0057	剥片	チャート	チャート1						2.04	15.80	23.65	6.21	
IV石1	プ ロック1	0058	剥片	チャート	チャート2						5.71	35.43	24.36	8.07	
IV石1	プ ロッケ1	0062	剥片	黒曜石	黒曜石1						0.71	24.26	10.28	3.35	
N石1	フ"ロック1	0063	砕片	チャート	チャート1						0.01	2.69	3.30	1.29	
IV石1	フ" ロッケ1	0064	砕片	チャート	チャート1						0.19	12.55	6.86	2.22	
	プロツケ1				チャート1						9.30	34.27		13.65	
	プ ロック1				チャート3						1.94	14.50		11.33	
	プロック1		137/12/14/1		チャート1						0.09	7.90	4.81	1.35	
	プ ロック1				チャート1						0.85	17.07	9.66	6.12	
	プロック1				チャート2						0.13	9.18	8.41	1.93	
	プ ロック1				チャート4					_		23.39		3.23	
					チャート1	1		-	-						
	プロック1					1						34.60			
	プロック1				チャート1	1						32.62		7.04	
	プロツケ1				チャート1	1	-					48.41		20.67	
product the second	プロック1				チャート1	1						27.09		9.04	
	プロック1		UNA 72.00 I		チャート3						0.07	9.85	4.96	2.09	
	プロツケ1		0.50-92-570-57		チャート1						0.08	7.63	6.16	2.06	
	ブ ロック1				チャート1							19.46		4.89	
	プロック1				チャート1							17.12		6.37	
	ブ ロック1				チャート1	3					The second second second second	68.81		31.30	
IV石1	プロツク1	0081	剥片	チャート	チャート1	2					59.49	48.05	46.85	44.43	
IV石1	プロツケ1	0082	剥片	チャート	チャート1	2					60.48	51.57	59.60	28.34	
IV石1	プロツケ1	0083	剥片	チャート	チャート1	3						45.21			
	プ ロック1			チャート	チャート1	2					108.38				
	プロック1		欠番												
	プロツク1			チャート	チャート1	2					997	22.81	50.07	9.45	
	プロツケ1				チャート1	3					198.79			47.26	
1000	プ ロツク1				チャート1	1					The state of the s	20.19	The second second second		
	プロック1				チャート1	1	-		- +		The second secon	36.02	and the latest and th	10.42	
IVILL	, n//1			チャート	7	Ť					1.10	30.02	30.44	10.42	

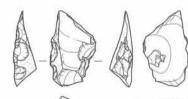
遺構名	記錄遺構No.	記錄遺物No.	器種	石材	母岩	接合資料No.	赤化	破砕	煤付	破碎面赤化	重量	長さ (mm)	₩ (mm)	厚き (mm)	排图No
IV石1	プ ロック1	0091	砕片	チャート	チャート1						0.68	14.64	9.40	4.52	
IV石1	プ ロック1	0092	砕片	チャート	チャート1						0.04	6.57	3.93	1.83	
IV石1	プ ロック1	0093	剥片	チャート	チャート3						0.31	14.37	8.11	3.04	
N石1	ブ ロック1	0094	剥片	チャート	チャート1	2					31.85	51.79	66.12	14.97	
IV石1	フ"ロック1	0095	剥片	チャート	チャート2							10.11	8.94	3.56	
IV石1	フ" ロツク1	0096	石核	チャート	チャート1	1					136.48		61.97		-
IV石1	プ ロッケ1	0098	剥片	チャート	チャート2							10.40	11.69	1.65	
IV石1	7 משלו	0100	剥片		チャート1	2						25.18	69.65	37.75	
IV石1	プロック1	0101	剥片		チャート1							13.50	15.31	8.23	
IV石1	プロッケ1	0103	剥片	E. 2.1 S.1	チャート1	3					11.54	1.00	31.28	9.86	
IV石1	プ ロック1	0104	砕片		チャート1						0.05	9.51	4.27	1.32	
IV石1	プロック1	0105	剥片		チャート2						0.20	8.87	18.55	2.20	
IV石1	プ ロック1	0151	石核		チャート4						4.39	16.38	25.32	8.29	
IV傑1	V+1	0001	礫	砂岩	7 1 1 1		0	0	×	0	18.37	10.00	20.02	0,20	
IV礫1	V+1	0001	礫	砂岩			0	0	×	Ö	117.48				
IV课1 IV礫1	V+1	0002	礫	砂岩			0	ő	×	Ö	6.52				
	ν+1 ν+1		傑	チャート					×						
IV礫1		0004					0	0		0	10.50				
IV礫1	1+1	0005	礫	砂岩			0	X	0	×	787.4				
IV礫1	レキ1 1 + 1	0006	礫	砂岩			0	0	X	0	1.96				
IV礫1	141	0007	礫	砂岩			Ŏ	0	X	0	3.68				
IV礫1	レキ1	0008	礫	砂岩			0	0	×	0	21.13				
IV礫1	141	0010	礫	砂岩			0	0	×	Ō	4.58				
IV礫1	レキ1	0011	礫	砂岩			0	0	×	0	2.81				
IV礫1	レキ1	0012	礫	砂岩			0	0	×	0	16.89				
IV礫1	141	0013	礫	砂岩			0	0	×	0	9.62				
IV礫1	レキ1	0014	礫	チャート			0	0	×	0	7.67				
IV礫1	ルキ1	0015	礫	砂岩			0	0	×	0	1.38				
IV礫1	レキ1	0016	礫	砂岩			0	0	×	0	45.96				
IV礫1	レキ1	0017	礫	砂岩			0	0	×	0	12.33				
IV礫1	レキ1	0018	礫	砂岩			0	0	×	0	2.44				
IV礫1	レキ1	0019	礫	砂岩			0	0	×	0	3.63				
IV礫1	レキ1	0020	礫	チャート			0	0	×	0	6.53				
IV礫1	レキ1	0021	礫	チャート			0	0	×	0	7.67				
IV礫1	レキ1	0022	礫	チャート			0	0	×	0	9.24				
IV礫1	レ ‡1	0023	礫	砂岩			0	0	×	0	1.78				
IV礫1	レキ1	0024	礫	砂岩			Õ	Ŏ	×	Õ	1.68				
IV礫1	ν±1	0025	礫	砂岩			Ŏ	Õ	×	Õ	0.29				
IV礫1	レキ1	0026	礫	砂岩			X	0	×	×	0.91				
IV礫1	レキ1	0027	礫	チャート			0	Ŏ	×	Ô	4.66				
IV礫1	V+1	0028	礫	チャート			ŏ	X	X	×	2.49				
IV礫1	141	0029	礫	砂岩			0	0	X	Ô	0.13				
IV礫1	b+1	0029	礫	砂岩			ŏ	0	×	ő	1.37	-			
IV條1	V+1	0030	礫	砂岩			0	0	×	0	3.08				
	ν+1 ν+1	0034		砂岩			0		20.00						
IV礫1			礫	ヴ石				0	×	0	27.76				
IV礫1	V+1		礫				0	0	X	0	1.19				
IV礫1	1+1	0046	礫	チャート			X	0	×	X	0.03				
IV礫1	レキ1 1 キュ	0050	礫	砂岩			0	×	X	×	1.51				
IV礫1	レキ1	0051	礫	砂岩			0	0	×	0	2.84				
IV礫1	V+1	0052	礫	砂岩			0	0	×	0	2.76				
IV礫1	レキ1	0053	礫	砂岩			0	×	×	×	8.47				
IV礫1	レキ1	0054	礫	砂岩			0	0	×	0	1.77				
IV礫1	レキ1	0059	礫	砂岩			0	0	×	0	1.60				
IV礫1	V÷1	0060	礫	チャート			0	×	×	×	0.17				
IV礫1	V÷1	0061	礫	チャート			0	×	×	×	5.35				
IV礫1	レキ1	0068	礫	チャート			0	0	×	0	0.58				

遺構名	記錄遺構No.	記錄遺物No	器種	石材	母岩	接合資料No.	赤化	破砕	煤付	破碎凿赤化	重量	摂き (mm)	幅 (mm)	厚き (mm)	排図N
IV礫1	ν ‡1	0097	礫	チャート			×	0	×	×	0.23				
IV礫1	V÷1	0099	礫	砂岩			0	0	×	0	4.41				
IV礫1	レキ1	0102	礫	砂岩			0	0	×	0	0.55				
IV礫1	レ キ 1	0106	礫	チャート			0	0	×	Ó	9.12				
IV礫1	ν÷1	0107	礫	チャート			Ö	×	×	×	2.72				
IV礫1	ν÷1	0108	礫	チャート			×	0	×	×	0.38				
IV礫1	ν÷1	0109	礫	砂岩			0	×	×	×	91.70				
IV礫1	ν÷1	0110	礫	砂岩			O	0	0	0	29.42				
IV礫1	V+1	0111	礫	チャート			Õ	Õ	×	Ŏ	2.06				
IV礫1	ν÷1	0112	礫	砂岩			Ŏ	Ö	×	0	93.67				
IV礫1	ν±1	0113	礫	チャート			Ö	Ö	×	ŏ	32.25				
IV礫1	ν+1	0114	礫	チャート			Õ	ŏ	×	Õ	203.38				
IV礫1	レキ1	0115	礫	チャート			Ö	Õ	×	Ö	30.63				-
IV礫1	D#1	0116	礫	砂岩			0	0	×	O	87.68				-
IV條1 IV礫1	V+1 V+1	0117	礫	砂岩			0	0	×	0	218.56				
IV傑1 IV礫1	V+1 V+1	Company of the Company	礫	チャート			0	0	×	0	54.15				
and the second section in the		0118		砂岩			0	0	0		55.78			-	
IV礫1	V+1	0119	礫						15.50	0					
IV礫1	V+1	0120	礫	チャート			0	0	X	0	8.18				
IV礫1	レキ1 1	0121	礫	砂岩			0	0	X	0	131.36				
IV礫1	V+1	0122	礫	砂岩			0	0	×	0	530.24				
IV礫1	V+1	0123	礫	チャート			0	X	X	×	4.01				
IV礫1	V+1	0124	礫	砂岩			0	0	×	0	6.22				-
IV礫1	V+1	0125	礫	砂岩			0	0	×	0	421.59				
IV礫1	V+1	0126	礫	砂岩			0	0	×	0	762.8				
IV礫1	レキ1	0127	礫	チャート			0	×	×	×	617.8				
IV礫1	レキ1	0128	礫	砂岩			0	0	×	0	192.84				
IV礫1	レ ‡1	0129	礫	砂岩			0	×	×	×	21.71				
IV礫1	レキ1	0130	礫	砂岩			0	0	×	0	2.41				
IV礫1	レキ1	0131	礫	砂岩			0	0	×	0	21.72				
IV礫1	レ ‡1	0132	礫	砂岩			0	0	×	0	816.0				
IV礫1	レキ1	0133	礫	砂岩			0	0	×	0	972.3				
IV礫1	レキ1	0134	礫	砂岩			0	0	×	0	122.33				
IV礫1	レ ‡1	0135	礫	砂岩			0	0	×	0	1203.6				
IV礫1	レキ1	0136	礫	砂岩			0	0	×	0	4.34				
	レキ1	0137	礫	砂岩			0	0	×	0	1.11				
IV礫1		0138	礫	砂岩			0	0	×	0	1.55				
IV礫1	レキ1	0139	礫	砂岩			Ö	Ō	×	Ō	1.94				
IV礫1	レ ‡1	0140	礫	砂岩			Ö	Ö	×	Õ	2.26				
IV礫1	レ キ 1	0141	礫	砂岩			Ŏ	Ŏ	X	Õ	4.25				
IV礫1	ν+1	0143	礫	チャート			0	Õ	X	0	168.50				
IV礫1	L=1	0144	礫	砂岩			0	Ö	0	Ö	164.03				
IV礫1	V+1	0145	礫	砂岩			Ö	0	X	ŏ	63.24				
IV礫1	141	0146	礫	砂岩			Ö	Ö	X	Ő	6.03				
IV课1	V+1	0147	礫	チャート			0	Ö	X	ŏ	0.49				
14 141	V+1 V+1	00-6	礫	砂岩			Ö	0	×	0	8.12				
	レ+1 レ+1		礫	チャート			0	0	×	Ő	2.59				-
		00-12			# L. L.		0.	0	^	U		17.70	1055	4.00	
	KNB-1	00-15	剥片		チャート1	- 0						17.70		4.93	
	KNB-1	00-16	剥片		チャート1	3	_	~	25	~	0.60	8.49	22.03	4.53	
	KNB-1	00-18	礫	砂岩			0	0	X	0	19.90				

第6表 石器・礫属性表(3)

【石器】

1はナイフ形石器である。横長剥片を素材とする。両側縁とも に主要剥離面側からの調整加工が施される。左側縁は下半部に粗 く、上半部に細かな調整を加え、右側縁は打点部分にわずかな調 整加工を施して全体の形を整えている。



1 石器集中 1 Sh (ブロック 1-39)

第15図 出土石器 (2/3)

4. 上永久保遺跡第2地点の調査

1)調査の概要

第2地点は、埼玉県入間郡三芳町上富1696-3他に位置する。調査は工場増築に先立つ遺跡の範囲及び性格・内容を把握するための試掘確認調査として、平成20年10月17日~10月22日にかけて3,109㎡を実施した。調査の結果、旧石器時代の石器集中、礫群、時期不明の土坑が検出されたため、申請者と協議を行い、遺構が確認された範囲周辺は一切掘削をせず、盛土のみを行って遺構を保存することとなった。今回の調査地は、周知の埋蔵文化財包蔵地(県遺跡番号32-030)の南部中央に位置し、第1地点の西側隣接地にあたる。

2) 遺構と遺物

遺構は、旧石器時代IV層より礫群1箇所、時期不明の土坑3基が検出され、遺物は石器3点、礫34点が出土した。

【石器集中】

石器集中1(第17図)

調査区中央北側に位置し、礫群1の分布域と重なる。石器の分布は南北2.5m×東西0.9mで散漫に広がる。垂直分布は9層に分布し、第2地点で実施した自然科学分析の結果(「IV.自然科学分析」参照)から、IV層の石器集中であると判断した。石器の総点数は3点、出土石器はナイフ形石器、剥片である。

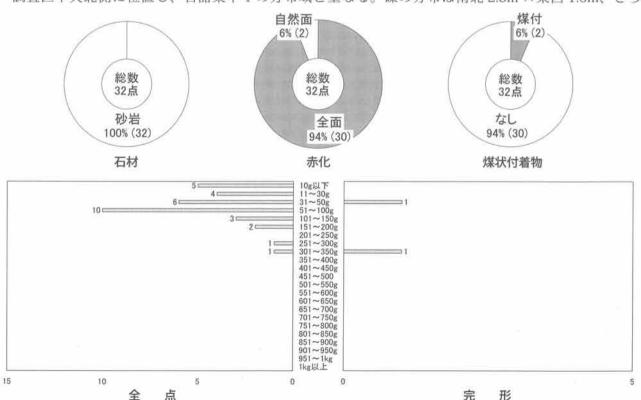
母岩名/器種	ナイフ形石器	剥片	点数	重量(g)	点数比	重量比
が「双質無色安山岩田	1	1	2	4.04	66.67%	40.12%
黒曜石1	1		1	6.03	33. 33%	59.88%
合計	2	1	3	10.07	100.00%	100.00%

第7表 IV層石器集中1 母岩別器種一覧表

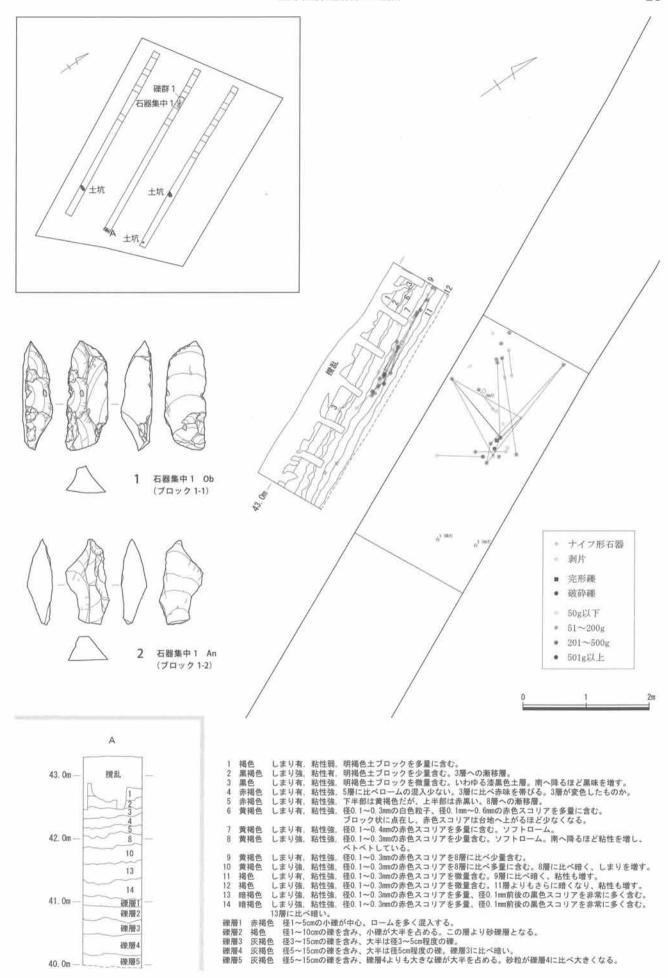
【礫群】

礫群1(第17図)

調査区中央北側に位置し、石器集中1の分布域と重なる。礫の分布は南北2.3m×東西1.6m、さら



第16図 IV層礫群1 石材・赤化・煤状付着物・重量グラフ



第17 図 遺構分布図 (1/1,200)・IV層石器集中 1・礫群 1 分布図 (1/60)・土層断面図 (1/60)・出土石器 (2/3)

遺構名	記錄遺構No.	記錄遺物No.	器種	石材	母岩	赤化	破砕	煤付	破碎而赤化	重量 (g)	長き (mm)	幅 (mm)	浮さ (mm)	挿図No
	イブッ	0038	礫	砂岩	111.703227	0	0	×	0	13.55				
	イブッ	0039	礫	砂岩		0	×	×	×	1035.9				
IV石1	プ ロック1	0001	ナイフ形石器	黒曜石	黒曜石1					6.03	39.18	27.53	11.63	1
IV石1	ブ ロッケ1	0002	ナイフ形石器	ガラス質黒色安山岩	ガラス質無色安山料1					3.84	33.66	15.55	8.98	2
IV石1	フ"ロック1	0003	剥片	ガラス質黒色安山岩	ガラス資源色安山谷1					0.20	13.75	8.06	3.90	
IV礫1	V‡1	0004	欠番											
IV礫1	V±1	0005	礫	砂岩		0	0	×	0	21.39				
IV礫1	レキ1	0006	欠番											
IV礫1	レキ1	0007	礫	砂岩		0	0	×	0	148.82				
IV礫1	レキ1	0008	礫	砂岩		0	0	×	0	47.24				
IV礫1	1+1	0009	礫	砂岩		0	0	×	0	75.87				
IV礫1	レキ1	0010	礫	砂岩		0	0	×	0	15.98				
IV礫1	レキ1	0011	礫	砂岩		0	0	×	0	189.39				
IV礫1	λ ‡1	0012	礫	砂岩		0	0	×	0	271.03				
IV礫1	レキ1	0013	礫	砂岩		0	0	×	0	84.74				
IV礫1	レキ1	0014	礫	砂岩		0	×	×	×	333.76				
IV礫1	D+1	0015	礫	砂岩		0	0	×	0	30.06				
IV礫1	ν ‡1	0016	礫	砂岩		0	X	X	×	31.68				
IV礫1	ν±1	0017	礫	砂岩		0	0	×	0	79.81				
IV礫1	V±1	0018	礫	砂岩		0	0	×	0	29.16				
IV礫1	レキ1	0019	礫	砂岩		0	0	X	0	2.17				
IV礫1	レキ1	0020	礫	砂岩		0	0	×	0	3.67				
IV礫1	レキ1	0021	礫	砂岩		0	0	0	0	36.51				
IV礫1	レキ1	0022	礫	砂岩		0	0	0	0	66.85				
IV礫1	レキ1	0023	礫	砂岩		0	0	×	0	55.71				
IV礫1	レキ1	0024	礫	砂岩		0	0	×	0	4.36				
IV礫1	λ ‡1	0025	礫	砂岩		0	0	×	0	36.46				
IV礫1	レキ1	0026	礫	砂岩		0	0	×	0	2.69				
IV礫1	レキ1	0027	礫	砂岩		0	0	X	0	104.97				
IV礫1	レキ1	0028	礫	砂岩		0	0	×	0	65.92				
IV礫1	レキ1	0029	礫	砂岩		0	0	×	0	54.36				
IV礫1	レキ1	0030	礫	砂岩		0	0	×	0	38.21				
IV礫1	レキ1	0031	礫	砂岩		0	0	×	0	133.16				
IV礫1	λ ‡1	0032	礫	砂岩		0	0	×	0	44.25				
IV礫1	レキ1	0033	礫	砂岩		0	0	×	0	71.68				
IV礫1	レキ1	0034	礫	砂岩		0	0	×	0	68.09				
IV礫1	レキ1	0035	礫	砂岩		0	0	×	0	167.86				
IV礫1	レキ1	0036	礫	砂岩		0	0	×	0	5.55				
IV礫1	ν ‡1	0037	礫	砂岩		Õ	Ö	×	0	54.54				
17,700.00ERT	KNB-2	00-1	礫	砂岩		Õ	Ö	×	Õ	138.74				
	KNB-2	00-2	砕片		チャート1			0.00		17.14-17.25.27.41.100	22.49	30.35	7.70	

第8表 石器・礫属性表(1)

に調査区外へ広がると思われる。内部は長径 0.6m の範囲でやや密集する集中部とその北側に広がる礫で構成される。垂直分布は 9 層に安定して位置し、石器集中と同様、IV層の礫群であると考えられる。礫の総点数は 32 点、重量は 50g 以下が 15 点と多いものの、51~200g も 15 点と同数であり、第 1 地点の礫群礫と比べ若干大きめの礫で構成されている。石材は全て砂岩であり、煤状付着物は少ないが大半の礫が破砕面を含めた全面に赤化が認められる点は、第 1 地点の礫群礫と同様である。接合関係は礫群内のみで 7 個体が見られた。

【石器】

1、2 はナイフ形石器である。1 は打点側を基部とする。左側縁には主要剥離面側からの大きな急角 度剥離を加えて全体を形作った後、細かな調整加工が施される。右側縁には下部に主要剥離面側からの 細かな調整が加えられる。また、左側縁下部には主要剥離面にも背面側からのわずかな調整が見られる。 2 は打点側を基部とする。右側縁全体に主要剥離面側からの粗い急角度剥離を施し、成形している。

5. 藤久保東第二遺跡 D 地点の調査

1) 遺跡の立地と概要

藤久保東第二遺跡は、武蔵野台地東端部を開析する新河岸川へ流れ込む江川上流部右岸に位置する。これまで3地点を調査し、旧石器時代の立川ロームX層より局部磨製石斧を含む石器群が検出されている。また周辺には同じく旧石器時代の遺構・遺物が多数検出されている藤久保東遺跡、藤久保東第三遺跡、俣埜遺跡が位置し、藤久保第二遺跡を含めて藤久保東遺跡群とも呼ばれる。

2)調査の概要

今回の調査地点であるD地点は、埼玉県入間郡三芳町藤久保 725-3 に位置する。調査はアパート建設に先立つ遺跡の範囲及び性格・内容を把握するための試掘確認調査として、平成 20 年 5 月 7 日~ 5 月 19 日にかけて 553 ㎡を実施した。調査の結果、旧石器時代の石器、焼石が検出されたため、申請者と協議を行い、遺構が確認された範囲周辺は保護層を設けて、遺構を現状のまま保存することとなった。今回の調査地は、周知の埋蔵文化財包蔵地(県遺跡番号 32-010)の東端部に位置する。

3)遺構と遺物

遺構は、旧石器時代VI層より礫群2箇所、IV層より石器集中1箇所、礫群1箇所が検出され、遺物は石器4点、礫74点が出土した。調査範囲が限定されており、石器集中・礫群の認定は難しいが、調査の結果からは、調査区西側に礫群2箇所、南側に礫群1箇所が分布していると思われる。

D地点は富士見江川の谷へ向かって地形が緩やかに傾斜する斜面上に位置しており、ローム層よりも上部には、いわゆる「漆黒色土層」など谷部に見られる特徴的な土層堆積が認められ、またローム層も二次堆積の影響を受けて台地上の標準的な堆積とは異なり、分層が困難であった。

遺構は、西側に位置する礫群 2 箇所が VI 層相当層より検出され、南側の礫群 1 箇所は IV 層相当層より検出された。なお、石器は 4 点全で IV 層相当層より出土している。西側の VI 層礫群 2 箇所は総点数 37 点、重量は 1 点を除き全て 100g 以下、特に 10g 以下が 20 点と小さな破砕礫で構成

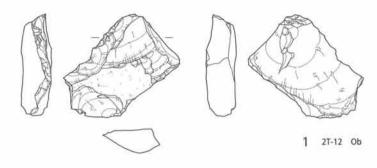


第 18 図 調査位置図 (1/2.500)・調査区設定図 (1/1.200)

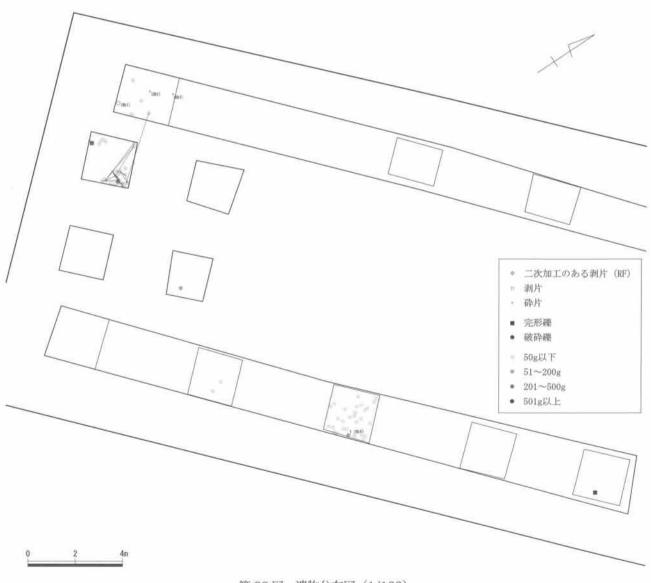
される。石材は砂岩が 70%にあたる 26 点と最も多く、次いでチャート 10 点、頁岩 1 点である。 赤化は 2 点を除く 35 点が破砕面を含む全面に認められたものの、煤状付着物は全点で確認されていない。接合関係は 7 個体が見られた。南側の \mathbb{N} 層礫群は総点数 33 点、重量は全て 50g 以下、特に 10g 以下が 26 点とかなり小さな破砕礫で構成される。石材は砂岩が 76%を占め 25 点、次いでチャート 7 点、ホルンフェルス 1 点である。赤化は全点で全面に認められたが、煤状付着物は 1 点で確認されたのみである。接合関係は見られなかった。

【石器】

1は二次加工のある剥片である。打面 調整剥片を素材とする。左側縁全体に主 要剥離面側からの調整加工が施され、特 に上半部には細かな調整が見られる。削 器状の使用が考えられようか。



第19図 出土石器 (2/3)



第20 図 遺物分布図 (1/160)

遺構名		記錄遺物No.	3434,5,64	石材	母岩	赤化	破砕	煤付	破碎面赤化	重量	長き (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	挿図No
	1T	0001	礫	砂岩		0	0	×	0	9.29				
	1T	0002	礫	砂岩		0	0	×	0	2.06				
	1T	0003	礫	砂岩		0	0	×	0	4.84				
	1T	0004	剥片	黒曜石	黒曜石1					0.25	12.35	10.97	3.16	
	1T	0005	礫	砂岩		0	0	×	0	37.71				
	1T	0006	砕片	黒曜石	黒曜石1					0.54	9.04	11.71	7.94	
	1T	0007	砕片	黒曜石	黒曜石1					1.12	16.31	15.48	6.48	
	2T	0008	礫	砂岩		0	0	×	0	26.25			323,022	
	2T	0009	礫	チャート		0	0	×	0	2.55				
	2T	0010	礫	砂岩		0	0	×	0	5.98				
	2T	0011	礫	砂岩		O	O	×	Ö	0.85				
	2T	0012	二地かいのある例に	黒曜石	黒曜石1	1					45.40	33.11	11.09	1
	2T	0013	礫	砂岩	7115 In 1-1 2	0	0	×	0	0.83	10.10	00,11	11.00	-
	2T	0014	礫	砂岩		0	0	×	ő	8.43				
	2T	0015	礫	砂岩		10	Ö	×	ő	6.33				
	2T	0016	礫	チャート		ŏ	Ö	×	ő	3.90				
	2T	0017	礫	砂岩		Ő	0	X	Õ	24.65				
	2T			ホルンフェルス										
	2T	0018	礫	砂岩		0	0	×	0	2.04				
		0019	礫			0			0	2.60				
	2T	0020	礫	砂岩		0	0	X	0	7.05				
	2T	0021	礫	チャート		0	0	×	0	9.83				
	2T	0022	礫	砂岩		0	.0.	×	0	10.50				
	2T	0023	礫	砂岩		0	0	×	0	2.01				
	2T	0024	礫	砂岩		0	0	X	0	29.11				
	2T	0025	礫	砂岩		0	0	×	0	2,43				
	2T	0026	礫	砂岩		0	0	X	0	0.64				
	2T	0027	礫	砂岩		0	0	×	0	5.81				
	2T	0028	礫	砂岩		0	0	×	0	31.58				
	2T	0029	礫	チャート		0	0	×	0	3.51				
	2T	0030	礫	砂岩		0	0	×	0	11.42				
	2T	0031	礫	砂岩		0	0	×	0	2.10				
	2T	0032	礫	砂岩		0	0	×	0	1.97				
	2T	0033	礫	砂岩		0	0	×	0	6.70				
	2T	0034	礫	砂岩		To	0	×	0	3.20				
	2T	0035	礫	チャート		0	0	×	0.	4.60				
	2T	0036	礫	砂岩		Õ	0	X	0	8.85				
	2T	0037	礫	砂岩		Ŏ	Ŏ	×	Õ	8.86				
	2T	0038	礫	砂岩		Ŏ	Ŏ	×	ŏ	0.85				
	2T	0039	礫	砂岩		O	Õ	×	Ŏ	28.79				
	2T	0040	礫	チャート		Ö	×	X	×	1179.7				
	2T	0040	礫	チャート		ŏ	ô	×	ô	20.25				
	2T	0041	礫	砂岩		ő	0	X	0	6.73				
	2T	0042	礫	砂岩		0	ő	ô	0	9.06				
	2T	0043	傑	チャート		0	0	X	0	7.18				
	P2	0044	礫	チャート		0	Ö	X	0					
				チャート						56.10				
	P3	0046	礫			0	0	×	0	5.57				
	P3	0047	礫	砂岩		0	0	×	0	3.79				
	P3	0048	礫	砂岩		0	0	×	0	11.52				
	P3	0049	礫	砂岩		0	0	×	0	4.91				
		0050	礫	砂岩		0	0	×	0	61.23				
		0051	礫	頁岩		0	×	×	X	5.60				
		0052	礫	チャート		0	0	×	0	2.00				
		0053	礫	チャート		0	0	×	0	13.13				
		0054	礫	砂岩		0	0	×	0	1.98				
		0055	礫	チャート		0	0	×	0	3.66				
	Р3	0056	礫	砂岩		0	0	×	0	5.07				
	P3	0057	礫	砂岩		0.	0	×	0	42.26				

遺構名	尼瑟遺構No.	記録遺物No.	器種	石材	母岩	赤化	破砕	煤付	破碎面赤化	重量	長さ (mm)	朝 (mm)	厚さ (mm)	挿図No
	P3	0058	礫	チャート		0	0	×	0	35.91				
	Р3	0059	礫	砂岩		0	0	×	0	27.32				
	Р3	0060	礫	砂岩		0	0	×	0	11.26				
	Р3	0061	礫	チャート		0	0	×	0	5.49	1.			
	P3	0062	礫	チャート		0	0	X	0	3.86				
	P3	0063	礫	チャート		0	0	×	0	9.11				
	P3	0064	礫	砂岩		0	0	×	0	11.69				
	P3	0065	礫	砂岩		0	0	×	0	5.18				
	P3	0066	礫	チャート		0	0	×	0	6.52				
	Р3	0067	礫	チャート		0	0	×	0	8.37				
	Р3	0068	礫	砂岩		0	0	X	0	9.82				
	P3	0069	礫	砂岩		0	0	×	0	39.28				
	P3	0070	礫	砂岩		0	0	×	0	3.39				
	P3	0071	礫	砂岩		Õ	Ō	×	0	16.69				
	P3	0072	礫	砂岩		Ō	×	×	×	248.12				
	P3	0073	礫	砂岩		O	0	×	0	0.85				
	P3	0074	礫	砂岩		Ō	O	×	Ö	10.99				
	P3	0075	礫	砂岩		ő	Õ	×	O	12.42				
	P3	0076	礫	砂岩		ŏ	Õ	×	ŏ	34.48				
	P3	00-1	礫	砂岩		0	O	×	ő	23.84				
	P3	00-2	礫	砂岩		0	Ö	×	Ö	22.02				
	FH2-D	00-1	土器	824-4				15/13		22.02				
	FH2-D	00-2	土器											
	FH2-D	00-3	土器											
	FH2-D	00-4	土器											
	FH2-D	00-4	礫	砂岩		0	0	×	0	112.90			-	
	FH2-D	00-6	礫	砂岩		ŏ	ŏ	0	ŏ	64.19				
	FH2-D	00-7	礫	砂岩		ő	Ő	×	ŏ	93.01				
	FH2-D	00-8	礫	砂岩		0	×	×	×	63.45				
	FH2-D	00-9	礫	砂岩		0	0	×	Ô	75.70				
	FH2-D	00-10	礫	砂岩		ŏ	ŏ	×	ŏ	48.56				
	FH2-D	00-10	礫	砂岩		0	×	×	×	63.09				
	FH2-D	00-11	礫	砂岩		ő	ô	×	ô	58.91				
	FH2-D	00-12	礫	砂岩		Ő	Ö	×	ŏ	47.80				
	FH2-D	00-13	礫	砂岩		0	Ö	×	0	24.97				
	FH2-D	00-14	礫	砂岩		0	×	×	×	41.54				
	FH2-D	00-15	礫	砂岩		ŏ	Ô	×	Ô	34.36				
	FH2-D	00-10	礫	砂岩		ő	Ö	×	Ö	37.45				
	FH2-D	00-17	礫	砂岩		ŏ	Ö	×	0	34.21				
	FH2-D	00-18	礫	砂岩		ő	0	ô	0	26.26				
	FH2-D	00-19	礫	砂岩		ŏ	Ö	×	ŏ	41.26				
	FH2-D	00-20	礫	頁岩		ő	Ö	×	Ö	14.67				
	FH2-D	00-21	礫	砂岩		0	0	×	0	14.90				
	FH2-D	00-22	礫	砂岩		ŏ	ŏ	×	Ö	7.88				
	And the state of t		礫			0	0	×	0					
	FH2-D	00-24		砂岩砂岩		0		×		10.61				
	FH2-D	00-25	礫				×		X					
	FH2-D	00-26	礫	砂岩		0		×	0	5.90				
	FH2-D	00-27	(樂	砂岩		0	0	×	0	4.02				
	FH2-D	00-28	礫	砂岩		0	X	×	×	6.69				
	FH2-D	00-29	礫	砂岩		0	0	×	0	3.57			-	
	FH2-D	00-30	傑 7506	砂岩		0	0	X	0	1.84				
	FH2-D	00-31	礫	砂岩		0	0	X	0	2.00				
	FH2-D	00-32	礫	砂岩		0	0	×	0	0.95				
	FH2-D	00-33	礫	砂岩		0	0	X	0	0.75				
	FH2-D	00-34	礫	砂岩		0	0	×	0	1.38				
	FH2-D	00-35	礫	砂岩		0	0	×	0	0.75				
	FH2-D	00-36	土器	1 1										

第V章 自然科学分析

上永久保遺跡第2地点の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

上永久保遺跡第2地点は、武蔵野台地北東部を構成する大井台(堀口,1986)の中央付近、砂川堀の谷に向かう左岸緩斜面上の標高約43m付近に位置している。大井台の地形区分は、高位の武蔵野面(M2面)と低位の立川面とに分けられており、立川面は不老川流域および福岡江川と砂川堀に挟まれた地域とされている(久保,1988; 貝塚ほか編,2000)。これらの区分では、不老川流域の立川面はTc3面に区分されているが、福岡江川と砂川堀に挟まれた地域については、詳細な対比はされていない。この点については、今回の分析調査における課題ともなっている。なお、Tc3面の形成年代は、2~1.5万年前と考えられている(貝塚ほか編,2000)。

今回の分析調査では、調査区内で確認された段丘礫層の上位に堆積するローム層および黒ボク土層を対象として、武蔵野台地における立川ローム層の指標テフラであるATとUGの2枚のガラス質テフラ(後述)の産状を確認することにより、その層序の対比を行う。また、黒ボク土層に相当する層位の中でも、特に黒色の強い層位(発掘調査所見では「漆黒色土層」と呼ばれている)について、植物珪酸体の産状と土壌理化学性から、色調の要因について考察する。さらに、ローム層下部の「暗褐色土層」とされた層位に、発掘調査所見では「金雲母」とされる光沢のある鉱物片が認められていることから、その鉱物片の確認と由来の推定を目的として、暗褐色土層および下位の礫層を対象に薄片を作製し、偏光顕微鏡による観察を行う。

1. 試料

試料は、調査区内の2トレ深掘で作成された現地表面下約3mまでの断面より採取された。断面の上部約2mは土壌により構成され、下部約1mは砂礫層である。発掘調査所見により、表土撹乱層の下位に、上位より1、2、3、4、5、8、10、13、14の各土層が分層され、14層の下位には砂礫層が1層から5層まで分層されている。

1層から 5層までは黒〜暗褐色を呈する火山灰土いわゆる黒ボク土であり、このうち、3層が上述した「漆黒色土層」に相当する。また、発掘調査所見では、4層は赤色味を帯び、赤色スコリアが多く含まれているとされている。8層および 10層は褐色を呈する火山灰土いわゆるロームであり、8層および 10層上半部までは多孔質を呈するソフトロームに相当する。13層および 14層は暗褐色を呈するロームであり、上述した「暗褐色土層」に相当すると考えられている。13層に比べて 14層の方がやや色調が暗い。

砂礫層の1層は、赤褐色を呈するシルト混じりの砂礫層であり、2層は褐色を呈する砂礫層、3層以下は灰褐色を呈する礫層とされ、色調は下位ほど暗くなり、また主体となる礫径も下位ほど大きくなる。 試料は、10層、13層、14層を除く、黒ボク土の1層から砂礫層の5層まで各層1点ずつ採取され、10層と13層は上部と下部の2点ずつ、14層は上部、中部、下部の3点が採取された。各層の層厚および試料採取位置は、分析結果を示した図1に柱状図として併記する。

2. 分析方法

(1)火山ガラス比分析

火山ガラス質テフラの検出と産状の確認を目的とすることから、2トレ深掘の土層全層を対象とし、 土層全層から採取された試料全13点を分析に供した。処理方法を以下に述べる。 試料約40gに水を加え超音波洗浄装置により分散、250メッシュの分析篩を用いて水洗し、粒径1/16mm以下の粒子を除去する。乾燥の後、篩別し、得られた粒径1/4mm-1/8mmの砂分をポリタングステン酸ナトリウム(比重約2.96に調整)により重液分離、重液分離した軽鉱物分における砂粒を250粒数え、その中の火山ガラスの量比を求める。火山ガラスは、その形態によりバブル型・中間型・軽石型の3タイプに分類した。各型の形態は、バブル型は薄手平板状、中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは破砕片状などの塊状ガラスであり、軽石型は小気泡を非常に多く持った塊状および気泡の長く伸びた繊維束状のものとする。また、火山ガラス比における「その他」は、主に石英および長石などの鉱物粒と変質等で同定の不可能な粒子を含む。

(2) 植物珪酸体分析

漆黒色土層の色調の要因としては、表層であった頃に繁茂した植物体に由来する腐植であることが考えられることから、植物体の痕跡として土壌中の植物珪酸体の産状を調べる。対象は、漆黒色土層の3層とその直上の2層および3層直下の4層の3点である。以下に処理方法を述べる。

各試料について過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法(ポリタングステン酸ナトリウム,比重 2.5)の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これをカバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。400 倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部(葉身と葉鞘)の葉部短細胞に由来した植物珪酸体(以下、短細胞珪酸体と呼ぶ)および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体(以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ)を、近藤(2004)の分類に基づいて同定・計数する。

分析の際には、分析試料の乾燥重量、プレパラート作成に用いた分析残渣量、検鏡に用いたプレパラートの数や検鏡した面積を正確に計量し、堆積物 1g あたりの植物珪酸体含量(同定した数を堆積物 1g あたりの個数に換算)を求める。

今回の結果は、植物珪酸体含量の一覧表で示す。これは、各層の違いについて植物の生育量を反映する植物珪酸体含量からも見るためである。各分類群の含量は10の位で丸め(100単位にする)、合計は各分類群の丸めない数字を合計した後に丸めている。また、各分類群の植物珪酸体含量とその層位的変化から稲作の様態や古植生について検討するために、植物珪酸体含量の層位的変化を図示する。

(3) 土壤理化学分析

植物珪酸体分析と同様に漆黒色土層を対象とすることから、植物珪酸体分析と同様の3点の試料を選択した。上述したように漆黒色土層の黒い色調は腐植含量が要因であると考えられるため、理化学性の分析項目としては腐植含量と MI (Melanic index) を選択し、さらに黒ボク土いわゆる火山灰土であることの確認としてリン酸吸収係数を選択した。庄子(1983)は、火山灰土と非火山灰土との識別の目安としてリン酸吸収係数が1200mg/100g ないし1500mg/100g 以上を火山灰土としている。

腐植含量はチューリン法(土壌標準分析・測定法委員会,1986)、MI (Melanic index)は腐植簡易分析法(本名・山本,1992)、リン酸吸収係数は2.5%リン酸アンモニウム液法(土壌標準分析・測定法委員会,1986)でそれぞれ行った。以下に各項目の操作工程を示す。

1) 分析試料の調製

試料を風乾後、土塊を軽く崩して2mmの篩でふるい分けをする。この篩通過試料を風乾細土試料とし、 分析に供する。また、風乾細土試料の一部を乳鉢で粉砕し、0.5mm 篩を全通させ、粉砕土試料を作成する。 風乾細土試料については、105℃で4時間乾燥し、分析試料水分を求める。

2) 腐植含量

粉砕土試料 0.100~0.500g を 100ml 三角フラスコに正確に秤りとり、0.4N クロム酸・硫酸混液

10ml を正確に加え、約200℃の砂浴上で正確に5分間煮沸する。冷却後、0.2% フェニルアントラニル酸液を指示薬に0.2 N硫酸第一鉄アンモニウム液で滴定する。滴定値および加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりの有機炭素量(Org-C 乾土%)を求める。これに1.724 を乗じて腐植含量(%)を算出する。3) Melanic Index (MI)

風乾細土試料約 1.0 gを 50ml 容遠心管に入れ、分注器で 0.5%NaOH 溶液約 25ml を加える。遠心管に蓋をしてテープで密封し、室温で 1 時間振とうする。振とう終了後、0.1% 高分子凝集剤溶液 $1\sim2$ 滴を加え、よく振り混ぜた後、4,000rpm、15 分間の遠心分離で抽出腐植溶液を得る。得られた抽出腐植溶液の約 1ml を試験管にとり、0.1%NaOH 溶液 20ml を分注器で加える(NaOH の濃度は約 0.1% となる)。この溶液について、分光光度計により 450、520nm の吸光度を測定する。450nm の吸光度が 1 を越える場合には、さらに 0.1%NaOH 溶液で希釈して測定する(測定時間は抽出後、3 時間以内)。結果の表示は、MI 値 = K450/K520 で示す。

4) リン酸吸収係数

乾土として 10.00 g になるように風乾細土試料を遠沈管にはかり、2.5% リン酸アンモニウム液 (pH7.0) 20ml を加え、時々振り混ぜながら室温で 24 時間放置する。乾燥ろ紙を用いてろ過し、そのろ液 100 μ 1 を 50ml メスフラスコに正確にとり、水約 35ml とリン酸発色 a 液 10ml を加えて定容し、よく振り混ぜる。発色後 30 分間放置し、420nm で比色定量する。定量された試料中のリン酸量を 2.5% リン酸アンモニウム液 (pH7.0) のリン酸量から差引き、リン酸吸収係数を求める。

(4) 土壤薄片作製鑑定

薄片作製鑑定は、試料を 0.03 mmの厚さに研磨して薄片にし、顕微鏡下で観察すると、構成する鉱物の大部分は透光性となり、鉱物の性質・組織などが観察できるようになるということを利用している。本分析では、暗褐色土層中の「金雲母」の確認とその由来を推定することから、暗褐色土層である 13 層上と砂礫層の 3 層中の砂分の 2 点を対象とする。なお、13 層上について採取された試料の外観観察からは、「金雲母」とされるような鉱物粒子が極めて微量しか認められなかったことから、補足参考試料として 14 層下についても薄片作製鑑定を行った。以下に手順を述べる。

薄片を作製するために試料をダイヤモンドカッターにより $22 \times 30 \times 15$ mm の直方体に切断して薄片用のチップとする。そのチップをプレパラートに貼り付け、# $180 \sim #800$ の研磨剤を用いて研磨機上で厚さ 0.1mm 以下まで研磨する。さらに、メノウ板上で# 2500 の研磨剤を用いて正確に 0.03mm の厚さに調整する。プレパラート上で薄くなった薄膜状の試料の上にカバーガラスを貼り付け観察用の薄片とする。薄片は偏光顕微鏡下において観察する。鏡下における量比は、薄片上の観察面全体に対して、多量 (> 50%)、中量 ($20 \sim 50$ %)、少量 ($5 \sim 20$ %)、微量 (< 5%) およびきわめて微量 (< 1%) という基準で目視により判定した。代表的な個所については下方ポーラーおよび直交ポーラー下において写真撮影を行い、写真図版として添付した。

3. 結果

(1)火山ガラス比分析

結果を表 1、図 1 に示す。1、2、3 の各層には少量の中間型および軽石型が含まれ、4 層と 8 層には 微量の中間型および軽石型が、5 層には少量の中間型と微量の軽石型が含まれる。10 層以下には極めて微量あるいはほとんど含まれない。なお、バブル型火山ガラスは、1 層から 14 層までの層位にわたって、極めて微量含まれるかまたは検出されない。

(2)植物珪酸体分析

結果を表 2、図 2 に示す。各試料からは植物珪酸体が検出されるものの、保存状態が悪く、表面に多

数の小孔(溶食痕)が認められる。植物珪酸体含量は、3層が約3.8万個/gと最も多く、次いで2層の約2.9 万個/gで、4層の約2.5万個/gである。

各試料からは同様な分類群が認められ、クマザサ属やネザサ節を含むタケ亜科、ススキ属を含むウシクサ族、イチゴツナギ亜科などが見られる。3層ではタケ亜科とともにススキ属を含むウシクサ族の産出が目立ち、2層や4層ではススキ属を含むウシクサ族が検出されるものの含量が少なく、クマザサ属やネザサ節を含むタケ亜科の産出が目立つ。

(3) 土壤理化学分析

結果を表 3 に示す。腐植含量は、2 層および 3 層は、約 8% でほぼ同量であるが、4 層はこれらより低い約 4.5% 程度である。MI 値は、いずれの層も約 1.6 であり、腐植酸の型は A 型に分類される。リン酸吸収係数は、2 層および 3 層は $2500 \sim 2600 \text{mg}/100 \text{g}$ であり、4 層は、それよりもやや低い 2080 mg/100 g である。いずれも火山灰土であることを示す。

(4) 土壌薄片作製鑑定

1)13層上

本試料には、粗粒シルト〜細粒砂サイズの砕屑片が少量〜中量程度含まれ、均質に散在している。鉱物片としては、石英、斜長石、白雲母、黒雲母、角閃石、単斜輝石、緑廉石、不透明鉱物およびイディングサイトが認められる。斜長石、白雲母およびイディングサイトは、それぞれ、微量程度で含まれる。岩片としては、亜角礫〜亜円礫状の頁岩、チャートおよび安山岩が認められる。その他の砕屑片としては、脈石英、火山ガラスおよび植物珪酸体がきわめて微量に含まれる。火山ガラスは無色透光性で、バブルウォール型を呈する。

2) 砂礫層 3層

本試料は、極細粒砂~極粗粒砂サイズの砕屑片から主に構成されている。鉱物片としては、石英が微量程度含まれ、その他、斜長石、黒雲母、角閃石、単斜輝石、ジルコン、イディングサイト、不透明鉱物などが認められる。岩片は亜角礫~亜円礫状で、中量の頁岩、少量の砂岩、微量のチャート、きわめて微量の粘板岩、ホルンフェルス、緑色岩、珪化岩などから構成される。

3) 14 層下(参考試料)

本試料には、中粒シルト〜細粒砂サイズの砕屑片が少量程度含まれ、均質に散在する。鉱物片としては、石英、斜長石、白雲母、黒雲母、角閃石、酸化角閃石、緑廉石、ジルコン、不透明鉱物およびイディングサイトが認められる。石英、白雲母およびイディングサイトは、それぞれ、微量程度で含まれる。岩片としては、亜角礫〜亜円礫状の頁岩、砂岩、チャート、ホルンフェルスおよび安山岩が認められる。その他の砕屑片としては、脈石英、火山ガラスおよび植物珪酸体がきわめて微量に含まれる。火山ガラスは無色透光性で、バブルウォール型を呈する。

4. 考察

(1) 層序対比

1層から 5層にかけて少量または微量検出された中間型火山ガラスおよび軽石型火山ガラスは、その 形態と産出層位から、立川ローム層上部ガラス質火山灰 (UG: 山崎,1978) に由来すると考えられる。今 回のように土壌中に特定テフラが混交して産出する場合は、テフラ最濃集部の下限がそのテフラの降 灰層準にほぼ一致すると言われている (早津,1988)。今回の分析結果では、最濃集部はあまり明瞭では ないが、相対的に見れば、5層から8層上部付近に最濃集部の下限が推定できる。すなわち、2トレ深 掘における UG の降灰層準は5層下部~8層上部に推定される。当社による武蔵野台地の立川ローム層 の分析例では、UG の降灰層準は、標準層位のⅢ層上部に推定されることが多い。したがって、8層は、 標準層位のⅢ層にほぼ対比され、8層の下位のローム層である 10層は、標準層位のⅢ層下部~IV層に概ね対比される可能性がある。また、4層には赤色スコリアが確認されているが、これは UG との層位関係から、青柳スコリアに対比される。青柳スコリアは、広く武蔵野台地において黒ボク土層最下部~ローム層最上部にかかる層位に認められており、上杉ほか(1993)は、更新世に噴出した古期富士テフラの中でも最上部に近い Y-141-1~ Y-138 に対比している。なお、UG の噴出年代については、町田・新井(1992)などでは 1.2 万年前とされてきたが、町田・新井(2003)では、その噴出年代は明記されていない。ただし、UG の由来と考えられている浅間火山の軽石流期のテフラの年代については、放射性炭素年代では $1.3 \sim 1.4$ 万年前(町田・新井 ,1992)、層位学的な年代も加味した暦年では $1.5 \sim 1.6$ 万年前とされているから、これらを UG の年代と考えて良い。

武蔵野台地の立川ローム層では、UG の認識以前に、姶良 Tn 火山灰 (AT: 町田・新井,1976) がバブル型火山ガラスの濃集層準として対比指標に用いられている。これまでの多くの分析例によれば、バブル型火山ガラスは標準層位のVI層付近に最も多く産出し、それより上位に向かって徐々に減少し、III層中部付近で UG の火山ガラスと入れ替わるという産状を示す。上述した早津に従えば、その降灰層準はVI層下限あるいはVII層上限付近に推定されることが多い。今回の分析結果では、バブル型火山ガラスの濃集は検出されず、極めて微量あるいはほとんど含まれないという産状であった。このことから、2 トレ深掘においては、AT の降灰は、砂礫層の堆積時期にあったと考えられる。おそらく、細粒の火山ガラスは、砂礫を堆積させた氾濫時に下流へ流出してしまったと考えられる。したがって、2 トレ深掘の 14 層および 13 層は、AT 降灰以降に形成された層位であり、標準層位との対比ではおそらく V層~IV層付近に対比される可能性がある。

立川段丘の地形面は、上位より Tc1、Tc2、Tc3 の 3 面に区分されているが、その区分として貝塚ほか編(2000)は、AT に覆われる Tc1 面、部分的に AT に覆われる Tc2 面、AT には覆われないが UG に覆われる Tc3 面と述べている。これに従えば、2 トレ深掘のローム層は Tc3 面のローム層に対比され、上永久保遺跡第 2 地点の立地する緩斜面は、Tc3 面に相当すると考えられる。

(2) 漆黒色土層(3層) について

土壌が黒色を増す要因のひとつとして、腐植(分解した有機物により形成された化合物)の集積が挙げられる。今回の分析結果では、3層は4層に比べて明らかに腐植含量が高く、また2層と比べても高い値を示すことが確認された。また、3層の腐植を構成する腐植酸の形態は、最も色調の黒いA型に分類され、その色調の程度を示す MI値(値が低いほど暗い)も4層に比べて低い。これらの分析値は、観察された各土層の色調と整合することから、3層の黒色味の強い要因は、色の濃いA型腐植酸からなる腐植の含有量が他の層位よりも高いことによると考えられる。

また、リン酸吸収係数により火山灰土と判定されることと、3層では、下位の4層や上位の2層と比較してススキ属を含むウシクサ族の植物珪酸体の産出が目立ったことから、3層の腐植の形成には、ススキなどの比較的乾いた場所に生育する植生と、主に風成塵として供給される火山砕屑物の堆積が関与したと考えることができる。新井(1983)や加藤(1983)などから、火山灰土の腐植の集積条件は、その主要なものとして、植生と気候および母材(武蔵野台地の立川ローム層では、富士山の火山噴出物を主体とした風成の砕屑物)の堆積の3つをあげることができる。この3条件のバランスによって腐植の集積が進んだり、阻害されたりすると考えることができる。おそらく、3条件のバランスが非常に良好であったことにより3層が形成されたのであろう。3層の層位は、青柳スコリアの直上とみることもできるが、その層位では、富士山の近傍においては、いわゆる富士黒土層が形成されている。上杉(1990)は、富士黒土層の形成時期について、富士山噴出のテフラ堆積速度が低いことを示し、また気候の温暖化し

た時期であることも述べている。今のところ3層がそのまま富士山近傍の富士黒土層に対比されるとはいえないが、富士黒土層とほぼ同時期に形成された層位である可能性もある。その場合、3層の形成条件として、温暖化の進む気候とススキ属を含むウシクサ族の生育状況そして母材の風成塵の主たる給源である富士山の噴出物の比較的少なかったことなどが、他の層位よりも優位な腐植集積条件となったため、特徴的に腐植の集積が進んだ結果「漆黒色土層」が形成された可能性がある。

なお、植物珪酸体分析では3層や4層、2層では、タケ亜科の産出が目立った。タケ亜科の植物珪酸体は他のイネ科と比較して風化に強く、生産量の多い点がこれまでの研究から指摘されており(近藤,1982;杉山・藤原,1986)、他の種類よりも残留しやすいことが知られている。そのため、今回の分析結果はタケ亜科が土層中に相対的に多く残留したことを反映していると考えられ、特にタケ亜科が卓越して繁茂していた植生を示すものではないと考えられる。ただし、少なくとも検出されたクマザサ属やネザサ節が調査区内および周辺で生育していたことが推定される。

(3) 暗褐色土層 (13・14層) 中の「金雲母」について

本報告では、発掘調査所見にある「金雲母」という用語に、あえて「」を付けている。これは、岩石鉱物における金雲母(Phlogopite フロゴパイト)とは区別するために付したものである。ここでは詳細な説明は行わないが、フロゴパイトは限定された化学組成を有しており、また一般的にはそれが産出する岩石も特殊な火成岩や変成岩である。日本考古学では、土壌中や土器の胎土中に含まれている金色に光る板状の鉱物片について、しばしば「金雲母」という名称が用いられているが、これらは岩石鉱物における黒雲母(Biotite バイオタイト)であり、本来の金雲母とは異なるものであることがほとんどである。したがって、今回の薄片観察にあたっては、黒雲母または反射光沢を示す板状の砕屑物の産状について検討した。

肉眼的にガラス状の反射光沢を示す物質としては、13 層上および 14 層下の試料では、白雲母、および火山ガラスが考えられる。白雲母は、いずれの試料においても微量程度で均質に散含されており、粒径は細粒砂~粗粒シルトサイズである。火山ガラスは、バブルウォール型の形態を示すため、反射光沢を有するが、きわめて微量の含有量であることから、反射光沢を示す主要な原因物質は白雲母であると考えられる。なお、2 点の試料には黒雲母も含まれるが、極めて微量であることと結晶度が不良でサイズも微小であることから、調査区の土層断面で肉眼的に「金雲母」として認識できる可能性は低いと思われる。

砂礫層3層の試料において反射光沢を示す物質としては、黒雲母が挙げられる。黒雲母の含有量は きわめて微量であるが、結晶度が良好で中粒砂~極粗粒砂のサイズで含まれているため、肉眼的に視認 されやすいものと推測される。

以上述べたように、今回の薄片観察では、暗褐色土層に相当する 13 層および 14 層ともに、「金雲母」に相当すると考えられる砕屑物は、微量の白雲母片である可能性があるが、その産状は肉眼で特に多く含まれるとされた「金雲母」の産状とは一致せず、土層断面で視認するのが難しいとみられる。一方、砂礫層中には肉眼でも認められる黒雲母片が含まれており、これが「金雲母」として認識される可能性はある。なお、白雲母も黒雲母も、ローム層の母材の主体となっている富士火山のテフラ中には含まれない鉱物であるため、その由来は主に段丘礫層中の砕屑物であると考えられる。さらに段丘礫層は、多摩川水系の河川作用により運搬・堆積した砕屑物からなることから、白雲母と黒雲母の由来は、多摩川水系の最上流部に分布する甲府深成岩体と呼ばれる花崗岩~花崗閃緑岩(日本の地質「中部地方 I 」編集委員会編、1988)に求めることができる。

<引用文献>

新井重光,1983,火山灰土の腐植.日本土壌肥料学会編 火山灰土-生成・性質・分類-.博友社,73-98. 土壌標準分析・測定法委員会編,1986,土壌標準分析・測定法.博友社,354p.

早津賢治,1988, テフラおよびテフラ性土壌の堆積機構とテフロクロノロジー - AT にまつわる議論に関係して - . 考古学研究 .34,18-32.

本名俊正・山本定博、1992、腐植の簡易分析法、土壌構成成分解析法、博友社、7-35.

貝塚爽平・小池一之・遠藤邦彦・山崎晴雄・鈴木毅彦編,2000,日本の地形 4 関東・伊豆小笠原. 東京大学出版会,349p.

加藤芳朗,1983,火山灰土の生成メカニズム.日本土壌肥料学会編 火山灰土-生成・性質・分類-.博友社.5-30.

久保純子,1988,相模野台地・武蔵野台地を刻む谷の地形-風成テフラを供給された名残川の谷地形-.地理学評論.61,25-48.

近藤 錬三,1982,Plant opal 分析による黒色腐植層の成因究明に関する研究. 昭和 56 年度科学研究費(一般研究 C) 研究成果報告書,32p.

近藤 錬三,2004,植物ケイ酸体研究.ペドロジスト,48,46-64.

町田 洋・新井房夫,1992,火山灰アトラス,東京大学出版会,276p.

町田 洋・新井房夫,1976, 広域に分布する火山灰-姶良 Tn 火山灰の発見とその意義 - . 科学,46,339-347.

町田 洋・新井房夫,2003,新編 火山灰アトラス.東京大学出版会,336p.

日本の地質「中部地方 I」編集委員会、1988、日本の地質 4 中部地方 I、共立出版、330p.

農林省農林水産技術会議事務局監修,1967,新版標準土色帖.

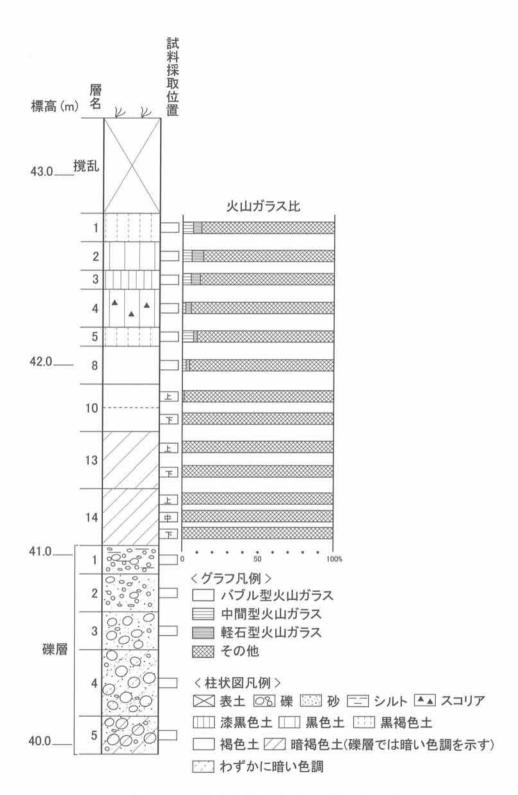
ペドロジスト懇談会,1984,野外土性の判定,土壌調査ハンドブック,博友社,p39-40.

杉山 真二・藤原 宏志,1986,機動細胞珪酸体の形態によるタケ亜科植物の同定-古環境推定の基礎 資料として-、考古学と自然科学,19.69-84.

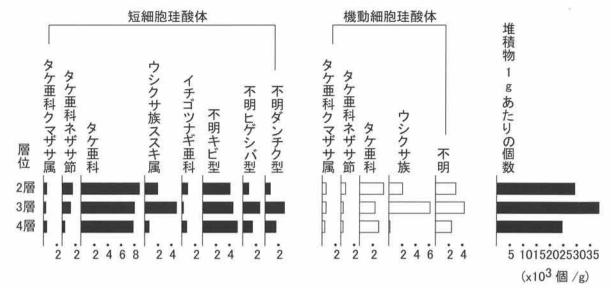
上杉 陽,1990,富士火山東方地域のテフラ標準柱状図-その1:S-25~Y-114-.関東の四紀,16,3-28.

上杉 陽・上本進二・伊藤ひろみ・佐藤仁美・土肥由美子,1993, いわゆる立川期のテフラ年代. 関東の四紀.18.13-28.

山崎晴雄 .1978. 立川断層とその第四紀後期の運動 . 第四紀研究 .16,231-246.



第21図 2トレ深掘の柱状図および火山ガラス比



第22図 2トレ深掘上部での植物珪酸体含量の層位的変化

試 料 名	バブル型火山ガラス	中間型火山ガラス	軽石型火山ガラス	その他	合計	
2トレ深堀:1層	2	17	14	217	250	
:2層	2	15	19	214	250	
:3層	1	14	15	220	250	
: 4層	0	5	9	236	250	
:5層	0	18	6	226	250	
:8層	0	6	6	238	250	
:10層上	0	2	3	245	250	
:10層下	-1	1	0	248	250	
:13層上	1	0	2	247	250	
:13層下	0	1	0	249	250	
:14層上	0	1	0	249	250	
:14層中	2	0	0	248	250	
:14層下	0	0	2	248	250	

第11表 2トレ深掘の火山ガラス比分析結果

			(個/g)	
種類		深掘		
試料番号	2層	3層	4層	
イネ科葉部短細胞珪酸体				
タケ亜科クマザサ属	500	300	500	
タケ亜科ネザサ節	1,600	1,300	400	
タケ亜科	8,700	8,000	7,800	
ウシクサ族ススキ属	1,900	4,800	700	
イチゴツナギ亜科	900	200	700	
不明キビ型	4,100	4,500	5,200	
不明ヒゲシバ型	900	2,600	1,500	
不明ダンチク型	800	2,900	1,600	
イネ科葉身機動細胞珪酸体				
タケ亜科クマザサ属	600	600	400	
タケ亜科ネザサ節	700	300	300	
タケ亜科	3,600	2,300	2,900	
ウシクサ族	2,000	6,100	200	
不明	3,000	4,300	2,400	
合 計				
イネ科葉部短細胞珪酸体	19,300	24,600	18,400	
イネ科葉身機動細胞珪酸体	9,900	13,700	6,200	
総計	29,200	38,300	24,600	

含量は、10の位で丸めている(100単位にする) なお、合計は各分類群の丸めない数字を合計した後に丸めている

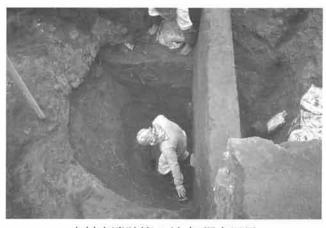
第12表 2トレ深掘の植物珪酸体含量

			腐植含量	Melan	ic Index	リン酸吸収係数 (mg/100g)	
試料名	土性	土色	(%)	MI值	腐植酸 の型		
2トレ深堀 2層	LiC	10YR2/1 黒	7.91	1.59	A型	2570	
2トレ深堀 3層	LiC	10YR2/1 黒	7.97	1.59	A型	2520	
2トレ深堀 4層	LiC	10YR2/2 黒褐	4.47	1.63	A型	2080	

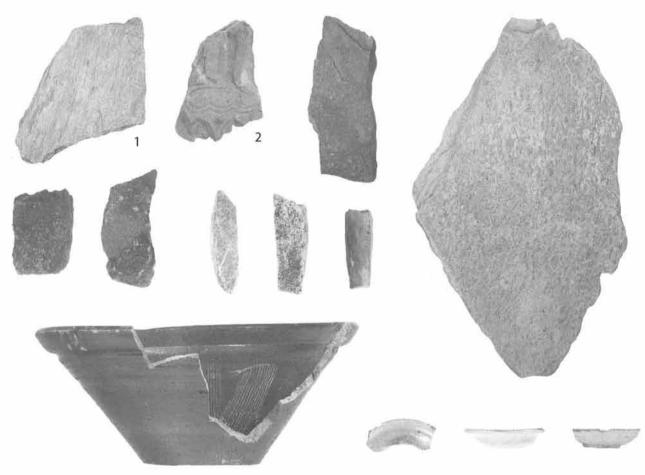
注. (1)土色:マンセル表色系に準じた新版標準土色帖(農林省農林水産技術会議監修, 1967)。 (2)土性:土壌調査ハンドブック(ペドロジスト懇談会編, 1984)の野外土性による。 LiC・・・軽埴土(粘土25~45%、シルト0~45%、砂10~55%)



本村南遺跡第9地点調查風景



本村南遺跡第9地点調查風景



本村南遺跡第9地点出土遺物(1/4)



本村南遺跡第 10 地点 1·2 号方形周溝墓



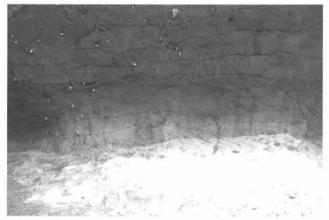
本村南遺跡第 10 地点 1·2 号方形周溝墓



本村南遺跡第10地点1号方形周溝墓北西溝断面



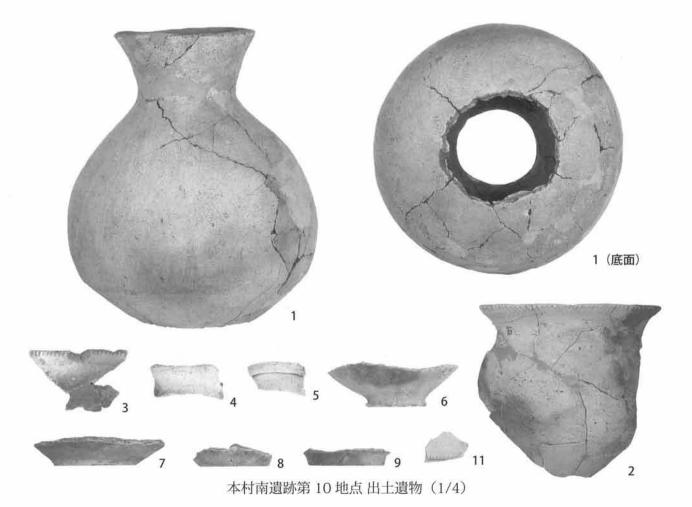
本村南遺跡第10地点1号方形周溝墓北東溝断面



本村南遺跡第10地点1号方形周溝墓方台部断面



本村南遺跡第10地点2号方形周溝墓北西溝断面





古井戸山遺跡VII次調査 遺物分布状況



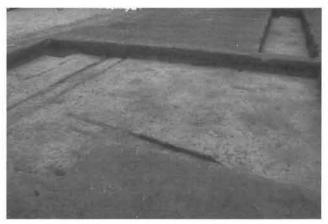
古井戸山遺跡VII次調査 遺物分布状況



古井戸山遺跡VII次調査 遺物出土状況



古井戸山遺跡VII次調査 遺物出土状況



古井戸山遺跡VII次調査完掘



藤久保東第三遺跡第3地点 炉穴確認状況



本村北遺跡 調查風景



本村北遺跡 完掘



生出窪遺跡 調查風景



生出窪遺跡 完掘



本村南遺跡 完掘



生出窪北遺跡 調査前全景



生出窪北遺跡 完掘



上永久保遺跡第1地点調查風景



上永久保遺跡第 1 地点 石器集中·礫群確認状況



上永久保第1地点出土遺物(3/4)







接合資料 1







接合資料 2

上永久保第1地点出土遺物(1/2)



藤久保東遺跡 U 地点 調査前全景



藤久保東遺跡 U 地点 完掘



藤久保東遺跡 V 地点 調査前全景



藤久保東遺跡 V 地点 完掘



藤久保東遺跡 V 地点 埋め戻し



藤久保東遺跡 W 地点 調查前全景



藤久保東遺跡 W 地点 表土剥ぎ



藤久保東遺跡 W 地点 溝跡確認状況



藤久保東遺跡 W 地点 溝跡・落し穴確認状況



生出窪南遺跡 調查前全景



生出窪南遺跡 表土剥ぎ



生出窪南遺跡 完掘



生出窪遺跡 調査風景



生出窪遺跡 完掘



藤久保東遺跡 調査前全景



藤久保東遺跡 表土剥ぎ



藤久保東遺跡 撹乱確認状況



本村南遺跡第11地点調查前全景



本村南遺跡第 11 地点 調查風景



本村南遺跡第 11 地点 住居址確認状況



本村南遺跡第11地点 溝跡確認状況



南止遺跡 H 地点 調查前全景



南止遺跡 H 地点 道路状遺構確認状況



南止遺跡 H 地点 石器出土状况



中東遺跡第2地点調査前全景



中東遺跡第2地点表土剥ぎ



中東遺跡第2地点石器集中確認状況



中東遺跡第2地点石器出土状況



中東遺跡第3地点(1次)調査前全景



中東遺跡第3地点(1次)調查風景



中東遺跡第3地点(1次)石器集中確認状況



中東遺跡第3地点(1次)ナイフ形石器出土状況



藤久保東第二遺跡 D 地点 調查前全景



藤久保東第二遺跡 D 地点 表土剥ぎ



藤久保東第二遺跡 D 地点 調查風景



藤久保東第二遺跡 D 地点 IV 層礫群確認状況



藤久保東第二遺跡 D 地点 土層断面





藤久保東第二遺跡 D 地点 出土遺物 (2/3)



藤久保東遺跡 X 地点 調查前全景



藤久保東遺跡 X 地点 表土剥ぎ



藤久保東遺跡 X 地点 完掘



藤久保東遺跡 X 地点 埋め戻し



生出窪南遺跡 調査前全景



生出窪南遺跡 完掘



本村南遺跡 調査前全景



本村南遺跡 表土剥ぎ



本村南遺跡 調査風景



本村南遺跡 完掘



本村南遺跡 埋め戻し



藤久保東第二遺跡 E 地点 調查前全景



藤久保東第二遺跡 E 地点 完掘



藤久保東第二遺跡 E 地点 埋め戻し



上永久保遺跡第2地点調查前全景



上永久保遺跡第2地点 表土剥ぎ



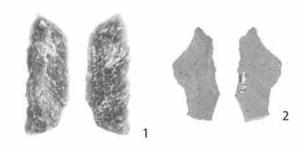
上永久保遺跡第2地点 礫群確認状況



上永久保遺跡第2地点 土坑確認状況



上永久保遺跡第2地点 土層断面



上永久保遺跡第2地点出土遺物(3/4)



中東遺跡第3地点(2次)調査前全景



中東遺跡第3地点(2次)遺物確認状況



中東遺跡第3地点(2次)石核出土状況



中東遺跡第3地点(2次)ナイフ形石器出土状況



東永久保遺跡 調查前全景



東永久保遺跡 表土剥ぎ



東永久保遺跡 調査風景

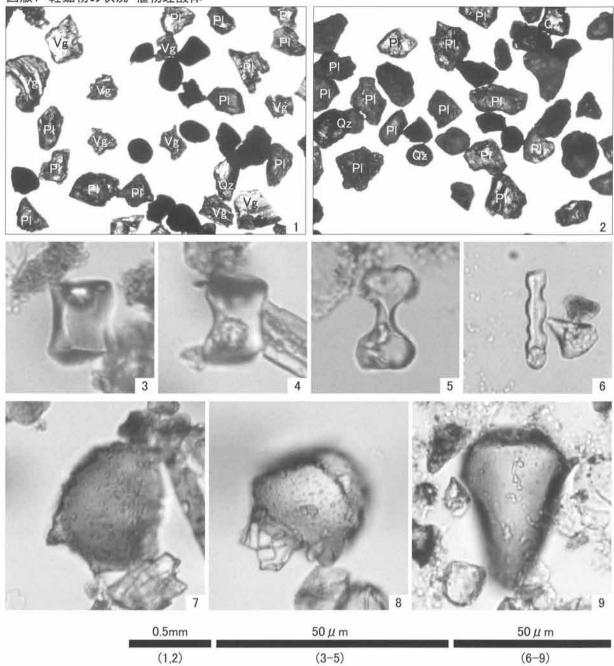


東永久保遺跡 完掘



東永久保遺跡 埋め戻し

図版1 軽鉱物の状況・植物珪酸体

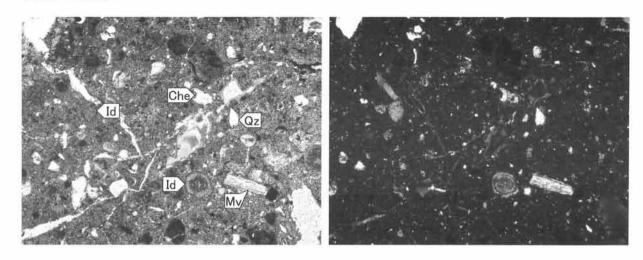


- 1. 軽鉱物(2トレ深堀;2層)
- 3. クマザサ属短細胞珪酸体(2トレ深掘;4層)
- 5.ススキ属短細胞珪酸体(2トレ深掘:3層)
- 7. クマザサ属機動細胞珪酸体(2トレ深掘:4層)
- 9. ウシクサ族機動細胞珪酸体(2トレ深掘:3層)

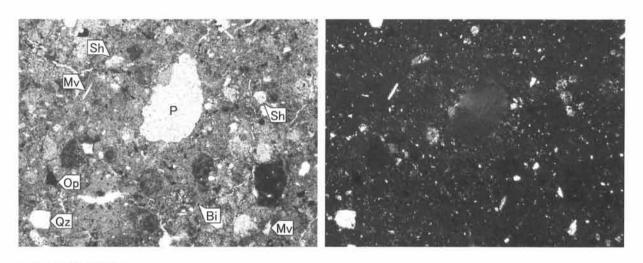
Vg:火山ガラス、Qz:石英、PI:斜長石、

- 2. 軽鉱物(2トレ深堀:14層中)
- 4. ネザサ節短細胞珪酸体(2トレ深掘;4層)
- 6. イチゴツナギ亜科短細胞珪酸体(2トレ深掘:2層)
- 8. ネザサ節機動細胞珪酸体(2トレ深掘;2層)

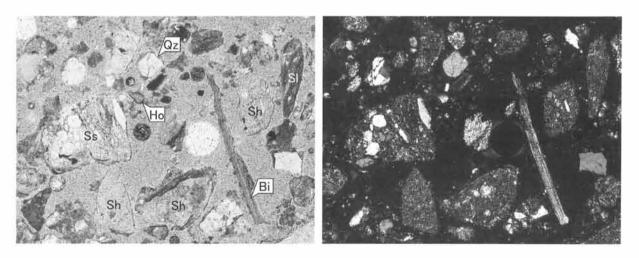
図版2 土壌薄片



1.2トレ深堀; I 層上



2.2トレ深堀; Ⅱ 層下



3.2トレ深掘:礫層3層 0.5mm

Qz:石英. Id:イディングサイト. Ho:角閃石. Bi:黒雲母. Mv:白雲母. Op:不透明鉱物. Che:チャート. Sh:頁岩. Ss:砂岩. Sl:粘板岩. P:孔隙. 写真左列は下方ポーラー、写真右列は直交ポーラー下。

報告書抄録

ふりがな	ちょう	ないいせきはっく	つちょう	さほうこ	くしょ					
書 名	町内遺	跡発掘調査報告書			巻 次 VII					
副書名						_				
巻 名										
シリーズ名	三芳町埋蔵文化財報告									
シリーズ番号	36									
編著者名	大久保 淳									
編集機関	三芳町教育委員会									
所在地	〒 354-8555 埼玉県入間郡三芳町大字藤久保 1100 番地 1									
発行年月日	2010 4	年(平成 22 年)3月	31日		===					
ふりがな 所収遺	亦	^{ふりがな} 所在地	市町村	-ド 遺跡 番号	北東			調査期間	調査 面積 (㎡)	調查原因
ほんむらみなみいせきだいきゅ 本村南遺跡第9		ちくまざわ 竹間沢 875-2	113247	32-001	35° 139°	49' 32'	24" 52"	20060424 20060523	35	個人住宅
ほんむらみなみいせきだいじゅうちてん 本村南遺跡第 10 地点		ちくまざわ 竹間沢 860-2,-3	113247	32-001	35° 139°	49′ 32′	24" 55"	20060706 20060718	50	個人住宅
かみながくぼいせきだいいちちてん 上永久保遺跡第1地点		かみとめ 上富 1716-2 他	113247	32-030	35° 139°	50′ 29′	13" 24"	20060911 20061006	1,416	工場増築
かみながくぼいせきだい上永久保遺跡第		かみとめ 上富 1696-3 他	113247	32-030	35° 139°	50′ 29′	12" 23"	20081017 20081022	3,109	工場増築
ふじくぼひがしだいにいせ 藤久保東第二遺		ふじくぼ 藤久保 725-3	113247	32-010	35° 139°	50′ 31′	12" 58"	20080507 20080519	553	アパート 建設
所収遺跡		種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項	
本村南遺跡第9地点		集落跡	近世		井戸跡 1 基、 土坑 26 基		板碑片、陶器片等			
本村南遺跡第10地点		墓跡	弥生時代後期		方形周溝墓2基		底部穿孔壺等			
上永久保遺跡第1地点 キャンプ跡		キャンプ跡	111111111111111111111111111111111111111		Ⅳ層 石器集中 1、礫群 1		ナイフ形石器等			
上永久保遺跡第2地点 キャンプ跡		キャンプ跡	旧石器		IV層礫群 1		ナイフ形石器等			
藤久保東第二遺跡 D 地点		キャンプ跡	旧石器		VI層礫群 2 IV層石器集中 1、 礫群 1			RF 等		

三芳町埋蔵文化財報告 36 町内遺跡発掘調査報告書VII

発行日 平成22年3月31日

編集機関 三芳町教育委員会

入間郡三芳町大字藤久保 1100-1

Tel.049-258-0019

発 行 三芳町教育委員会

印 刷 深志印刷株式会社